

日本独文学会
2014年 秋季研究発表会

JGG-Herbsttagung 2014

研究発表要旨

Abstracts

2014年10月11日(土)・10月12日(日)
Am Sa., 11. und am So., 12. Okt. 2014

第1日 午前9時50分より

第2日 午前10時より

1. Tag: ab 9.50 Uhr

2. Tag: ab 10.00 Uhr

会場 京都府立大学

Präfekturuniversität Kyoto

【発表者・発表会場一覧①】

【発表者・発表会場一覧②】

目 次

第 1 日 10 月 11 日 (土)

シンポジウム I (10:00~13:00) A 会場 (102 教室)1

名前の詩学

—文学における固有名あるいは名をめぐる諸問題

Poetologien der Namen

—Probleme der Namen in der deutschsprachigen Literatur vom Mittelalter bis zum 20. Jahrhundert

司会：前田 佳一

1. 名前の詩学への導入

—インゲボルク・バッハマンの講演『名前との付き合い』を手がかりに

前田 佳一

2. 名前と作者 —中世俗語文芸における作者性

山本 潤

3. ジャン・パウル『ジーベンケース』における名前の交換

江口 大輔

4. 「そんなの名前じゃないよ」

—トーマス・マン『トニオ・クレーガー』における名前の呼びかけの問題

木戸 繭子

5. 後期リルケ作品における呼びかけ

山崎 泰孝

シンポジウム II (10:00~13:00) B 会場 (103 教室)6

現代ドイツ文学 —境界の揺らぎ

Fluktuation der Grenzen in der deutschen Gegenwartsliteratur

司会：川島 隆

1. ゼロ年代以降のドイツ小説における「語り」の文化折衷論
—S・レヴィチャロフとJ・ブラントにおける「高尚」対「通俗」
真鍋 正紀
2. ネット時代の文学と「盗作」の問題
—ヘレーネ・ヘーゲマンの『アホロートルを轢き殺す』をめぐって
川島 隆
3. 「故郷」を再現する物語
—メリンダ・ナジ・アボニィ『鳩は飛んでいく』
麻生 陽子
4. アルカヘスト、造形芸術と言語芸術の融和
—キーファーとランスマイアー
徳永 恭子

口頭発表：文学 I (10:00~12:35) C 会場 (210 教室)11

司会：友田 和秀・宇和川 雄

1. 『パルチヴァール』におけるガーヴァーンの自律性と triuwe 松原 文
2. L. ティーク『ツェルビーノ王子』におけるメタ・メタフィクションの可能性
山田 よしこ
3. 挿入される経験
—ギュータースローの長編小説におけるエッセイイズムについて
桂 元嗣
4. マックス・フリッシュ『学校のためのヴィルヘルム・テル』における
Recht の所在 寺澤 大奈

口頭発表：ドイツ語教育 (10:00~12:35) E 会場 (203 教室)15

司会：田原 憲和・鈴木 智

1. Digitale Hilfen für das Schreiben in sozialen Netzwerken
—eine Brücke zwischen formellem und informellem Lernen
Ikumi Waragai・Marco Raindl・Tatsuya Ohta
2. Videokonferenzen im Oberstufenunterricht
—Möglichkeiten und Grenzen studentischen autonomen Arbeitens
Andreas Riessland
3. 日本語を母語とするドイツ語学習者の語順習得
—処理可能性理論と発話の複雑性から
星井 牧子
4. 教養ゼミナール「ドイツ環境ゼミ」の現状と今後
松岡 幸司

ブース発表 I (11:30~13:00) F 会場 (207 教室)19

イタリア・南チロルにおけるドイツ語教育
—ラディン語地域における複言語教育を中心に

小川 敦・境 一三・大澤 麻里子

ポスター発表 (13:00~14:30) G 会場 (209 教室)20

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

想起する帝国 —ナチス・ドイツにおける「集合的記憶」に関する考察

溝井 裕一・細川 裕史・齊藤 公輔

ドイツ語における浮き彫り付与 —物語における前景・背景と boundedness

舟本 正太郎

招待講演 I (13:00~14:00) C 会場 (210 教室)

Prof. Dr. Elke Brüggem (Universität Bonn)

Schwarz und Weiß, Orient und Okzident, Islam und Christentum.

Begegnung der Kulturen im „Parzival“ Wolframs von Eschenbach

招待講演 II (13:00~14:00) D 会場 (206 教室)

Prof. Dr. Wolfgang Braungart (Universität Bielefeld)

Literatur und Erziehung. Zu einer Aporie. Am Beispiel Stefan Georges und

aus Anlass der aktuellen George-Renaissance

シンポジウム III (14:30~17:30) A会場 (102 教室)22

中世ドイツ文学における「愛」の諸相

—「ミンネ」が文学テーマ化された意味を求めて

Aspekte der Liebe in der deutschen Literatur des Mittelalters

—Zur Relevanz der literarischen Thematisierung der *minne*

司会： 嶋崎 啓

1. 文学テーマ化される前の *minne* の語義 嶋崎 啓
2. 「高きミンネ」に対するミンネゼンガーの懷疑
—モールンゲンとヴァルターのミンネザングを例に 伊藤 亮平
3. ナイトハルトのミンネザングにおける「宮廷」の役割 田中 一嘉
4. *minne* (愛) における *triuwe* (誠実) の問題について
—『エネアス物語』と『トリスタン』を中心に 渡邊 徳明
5. 準主人公に映し出されるキリスト教的ミンネ理想像
—『ヴィレハルム』のギュブルク (アラベル) と
『散文ランスロット』のガラートを例に 浜野 明大

シンポジウム IV (14:30~17:30) B会場 (103 教室)27

もっと正義を！ —詩的道德を希求する文学の格闘

Mehr Gerechtigkeit! —Das Ringen der Literatur um die poetische Moral

司会： 香田 芳樹

1. プラトン『ポリテイア』における詩的正義の可能性とホメロス叙事詩 古澤 ゆう子
2. 「正義の女神は堪え忍ぶものに秤を傾ける」
—ドイツ中世叙事詩に描かれた復讐と法 香田 芳樹
3. 正義か運命か —18世紀家庭劇の展開をめぐる一考察 菅 利恵
4. 教養の再生 —現代正義論への布石 吉永 圭
5. 配分か交換か —近代以降の正義と文学について 大宮 勘一郎

口頭発表：文学 II (14:30~17:05) C会場 (210 教室)33

司会： 吉田 孝夫・西尾 宇広

1. ペーター・ヴァイスの戯曲『追究』の劇評史から見るホロコーストの記憶
高田 緑
2. ゲオルゲ・クライスの「精神運動年鑑」
松尾 博史
3. Dialogizität des Humors als Grundkonzeption in Christian Morgensterns
Poetologie
Herrad Heselhaus
4. 媒介性、誘惑、出来事 —ポール・ド・マンのヘルダリン受容をめぐって
林 英哉

口頭発表：文化・社会 I (14:30~17:05) D 会場 (206 教室)37
司会：山崎 明日香・小林 哲也

1. ロマニストとゲルマニスティク
—E・R・クルツィウスの著作におけるグリムへの言及
横道 誠
2. アードルフ・ヘンツェの筆跡判定
—そのメディア史および観相学史における意義
遠藤 浩介
3. 「読書の民主化」と「読書の規格化」
—ドイツ連邦共和国の読書文化に対するブッククラブの影響
竹岡 健一
4. ドイツ統一後におけるキューバ表象
—W・ヴェンダース監督音楽ドキュメンタリー『ブエナ・ビスタ・
ソシアル・クラブ』から H・C・ブーフ『ハバナに死す』まで
林寄 伸二

口頭発表：語学 (14:30~17:05) E 会場 (203 教室)40
司会：佐藤 和弘・金子 哲太

1. 否定呼応の意味論 —中高ドイツ語を中心に
西脇 麻衣子
2. 「外来語」の意味の変容をめぐって
薦田 奈美
3. 思考内容を表す直接話法に対する引用符の適用について
—トーマス・マンの『ヴェニスに死す』における検証
中島 伸
4. 発話行為副詞類のメタ言語的性質および談話における寄与
高 裕輔

ブース発表 II (16:00~17:30) F 会場 (207 教室)44
スマートフォンを使ったドイツ語アクティブラーニングの実践報告 熊谷 哲哉

第2日 10月12日(日)

シンポジウム V (10:00~13:00) A会場(102教室)45

Ästhetik der Landschaft in der Literatur von Ost und West

司会: Hiroshi Yamamoto

1. Imaginationen des chinesischen Gartens in der deutschen Literatur des
18. Jahrhunderts Arne Klawitter
2. Landschaftsbegriff und -ästhetik als Gehen und Beschreiben bei Xie
Lingyun, Petrarca und Basho Robert F. Wittkamp
3. Landschaft und Symbol bei Goethe Yuho Hisayama
4. Samoa als insula amoena des deutschen Kolonialismus
Thomas Schwarz

口頭発表: 文学 III (10:00~12:35) C会場(210教室)50

司会: 熊谷 哲哉・林寄 伸二

1. ハインリヒ・ロッチャーにおける俳優のための音声論の考察
—W. v. フンボルトの言語思想を手掛かりに 山崎 明日香
2. カフカの音モチーフ —『巢穴』における雑音 小松 紀子
3. テキスト内部に圧縮される声
—トーマス・クリングの詩作にみられるメディア論的視座 林 志津江
4. 謎と影の国をさまよう
—クレメンス・マイヤー『石の中』における日本 杵渕 博樹

口頭発表: 文化・社会 II (10:40~12:35) D会場(206教室)54

司会: 今井 敦・永畑 紗織

1. 灰と鉛の想像力
—アンゼラム・キーファーにおける錬金術とパウル・ツェラン 関口 裕昭

2. 東欧ユダヤ文化の躍動
 —イディッシュ演劇研究をカフカの磁場と政治的バイアスから解放する試み
 小倉 直子
3. モノの〈声〉
 —1930年頃のジークフリート・クラカウアーの「空間イメージ」論
 大島 直史

口頭発表：文学 IV (10:00～12:35) E会場 (203 教室)57

司会：奥田 敏広・武田良材

1. 自然は跳躍しない —カントとゲーテにおける自然認識の原理 茅野 大樹
2. 普遍的類型としての小説理論？
 —Fr. シュレーゲルの小説理論における小説反対論の影響について
 北原 寛子
3. レッシングを演技するフリードリヒ・シュレーゲル
 —ロマン主義的批評の生成 胡屋 武志
4. 近代における人間学と『創世記』
 —フリードリッヒ・シラーの『モーゼの原典の手引きによる
 原初の人間社会についての若干の考察』(1790)を中心に 土屋 京子

ブース発表 III (11:30～13:00) F会場 (207 教室)61

- 「人魚」文学を扱う授業の実践報告
 —多言語文学間の共同研究と教養教育への還元モデル
 中丸 禎子・川島 隆・田中 琢三

シンポジウム I (10:00~13:00)

A会場 (102教室)

名前の詩学

—文学における固有名あるいは名をめぐる諸問題

Poetologien der Namen

—Probleme der Namen in der deutschsprachigen Literatur vom Mittelalter bis zum 20. Jahrhundert

司会：前田 佳一

固有名は20世紀後半の言語哲学の主要なテーマであり続けたが、文学作品における固有名の機能に関しては日常言語に対する哲学的分析によって得られた知見の単なる適用によっては汲みつくせない多くの問題が存する。I・バッハマンが講演『名前との付き合い』でモデルネの文学における「名づけることの不可能性」について言及していることから窺えるように、文学は何よりもこの「名づけ」をめぐる原理的な問題と取り組んできたからである。本シンポジウムでは中世から第二次大戦後までのドイツ語文学における「名前との付き合い」方の歴史的経緯を概観し、作品内における名前の有する詩学上の機能と、名あるいは名づけという行為に存する産出的契機の有りようについて考察、討論することを目的とする。

導入として前田が文学における固有名の機能をめぐる先行研究を概観し、さらに上記のバッハマンの講演を考察することを通じて、議論の出発点とされるべき論点をいくつか提示する。加えて、バッハマンが自らの作品において「名づけることの不可能性」という問題といかにして取り組んだのかということについていくつかの作品の考察を通じて明らかにする。以後の発表は扱われる研究対象の年代順に行われる。山本は中世ドイツ語俗語文学諸作における作品と作者の名、そして語り手の名との間の多様な関係を考察し、中世において他ならぬ「名前」によって作品の帰せられるべきオーソリティが構築されていったさまを明らかにする。江口はJ・パウルの長編『ジーベンケース』において人間の個的生とその偶然性に付与された社会的名との齟齬が作品内においてどのように主題化されているのかという点について考察し、18世紀末の文学における「名前との付き合い」について一つの事例を提示する。木戸はその諸作品において極めて洗練された形で多岐にわたる固有名を駆使したT・マンの作品の中でも特に

その問題が凝縮した形で表れている『トニオ・クレーガー』を扱い、バトラーやオースティン等の言語行為論の知見も参照しながら「名づけ」という行為そのものがはらむ問題性（あるいは暴力性）について考察する。山崎は R・M・リルケの後期詩作品における「呼びかけ」の構造に着目し、バッハマン同様リルケにも見出される「名づけの不可能性」を、詩人がいかにして新たな詩的産出の契機としていたのかということについて、名前と物との関係をめぐりより根源的な問題に関しても問い直しつつ、明らかにする。

上記発表後は、会場来場者も交えつつ、各発表者が提示した論点を中心に文学における「名前との付き合い」の有り様を総括し、加えてこの問題が現代文学あるいは現代社会においていかなるアクチュアリティを有しうるかということについて徹底的に討論する。

1. 名前の詩学への導入

—インゲボルク・バッハマンの講演『名前との付き合い』を手がかりに

前田 佳一

Debus(2004)は文学における固有名の機能について扱った論文において①同一化②虚構化③特徴化、の三つを挙げている。そしてさらに③を(1)体を表す名(2)階層分けする名(3)音声効果を有した名(4)体現する名(5)神秘化(6)強調あるいは匿名化、の六つに分類している。この分類には一定の有効性があり、文学における固有名の役割について議論する上で共通の土台として参照されるべきものではあるが、他方で文学作品における名の有する産出的契機に触れるものではないという意味では不十分ともいえる。本発表はI・バッハマンの1959年の講演『名前との付き合い』において言及される「アウラ」、「放射力」、「魔術的地図」という概念を念頭に置きながらバッハマンの諸作品(とりわけ『アプリーエンにて』『ボヘミアは海辺にある』等の詩作品)を考察し、固有名あるいは名が詩作において有する産出的契機の究明の足がかりとする。

2. 名前と作者

—中世俗語文芸における作者性

山本 潤

中世初期の文芸では、誰が作者であるのかを示す作者の「名前」はテキストの主要素ではなかった。しかし12世紀末以降、俗語叙事文芸の主要ジャンルである宮廷叙事詩では、作者の作品内で名乗りが通例化する。ハルトマン・フォン・アウエは三人称を用いて作品が「ハルトマン」なる詩人の手によるものであることを明示する一方、「語り手ハルトマン」と聴衆の会話を作中に演出する。ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハは一人称による名乗りを行い、語り手と作者の一致を強調する。これらの「名前」は語りの主体の虚構性という主題を喚起する。また、ルードルフ・フォン・エムスは作品冒頭のアクロスティックにより自分の名前を刻印し、作者としての自己主張を行う位相を叙述の地平から意識的に分離させている。一方、英雄叙事詩の詩人はほとんどの場合名前を明かさず、物語は匿名の語り手によって語られる。しかし『ディエトリーヒの逃亡』ではハインリヒ・デア・フォグレーレなる人物が名乗りを上げる。この名前は作品内の当世批判を行うエクスクルスのみに結び付く架空の名前と解釈されており、そこには格言詩人としての作者性が現れている。本発表はこうした作品と「名前」の多様な在り方の検証を通し、文芸のメディア的状況や制作環境、作品の受容形態や作品素材の属する文芸伝統の特性、そして詩人の自己理解など、当時の文芸を巡る諸状況と作者性の様相を明らかにすることを試みる。

3. ジャン・パウル『ジーベンケース』における名前の交換

江口 大輔

ジャン・パウルの小説『ジーベンケース』(1796)は、主人公が送る窮乏した結婚生活の克明かつユーモラスな描写で知られ、研究の焦点もその部分に当てられることが多い。しかし、当初の構想段階から一貫して筋の中心に据えられていたのは名前の交換に端を発する主人公の死の偽装である。主人公ジーベンケースとその友人ライブゲーバーによる名前の交換、およびそれに起因する出

来事の数々が強調して物語るのは、個人の社会的なプロフィールが、個人そのものではなく、名前へと強固に結び付けられているという事態である。名前およびそれに結びついた社会的属性にいやおうなく振り回される個人は、しかし、交換不可能な個としての生を生きる。そうした個的な生は、ジャン・パウルにおいて「私 (Ich)」とよばれるものに相当すると思われるが、『ジーベンケース』では、この「私」の問題についても、様々な角度から問いかけがなされる。具体的には、嬰兒殺しや自らの死の予感など主人公と死を結びつけるモチーフの数々、および作中で亡くなる妻ルネッテの人物形象は、「私」の問題圏において捉えるべきである。本発表では以上の点を確認した後、主人公をはじめとする登場人物たちに付けられた名前そのものに注目した場合に見えてくるものについて、考察を行う。

4. 「そんなの名前じゃないよ」

—トーマス・マン『トニオ・クレーガー』における名前の呼びかけの問題

木戸 繭子

本発表においてはトーマス・マンの『トニオ・クレーガー』を中心に取り上げ、文学における名前の問題について「名前を呼ぶ」という言語行為の側面から迫ろうと試みる。『トニオ・クレーガー』における名前の問題についてはしばしば論じられてきたが、ここでは特に「呼びかけ」という行為の否定的な側面とそれが「主体」へ及ぼす作用に着眼する。『トニオ・クレーガー』は名前をめぐる興味深い場面からはじまる。そこでトニオは思いを寄せる友人に名前ではなく苗字で呼びかけられ、トニオという名前を「そもそも名前とは言えない」と否定される。ある名前で呼びかけられることによって傷つけられる、あるいは「きちんとした名前」で呼ばれることができないという場面は、その後のダンスの場面や故郷でのエピソードでも繰り返される。このような呼びかけの「失敗」によってトニオはアウトサイダーとしての「主体」を構築していく。ジュディス・バトラーは『触発する言葉』においてJ. L. オースティンの言語行為論などを参照しながら中傷する言葉がどのような形で人を傷つける力を獲得するかという点について論じた。本発表ではこのバトラーの議論を参照し、トニオ・クレーガーにおいて名前による呼びかけがどのように「行為体」としての主人

公を起動し、そしてそれがいかに「呼びかけの当初の意図をこえる一連の効果」(バトラー)を生み出していくのかについて論じる。

5. 後期リルケ作品における呼びかけ

山崎 泰孝

他の発表が固有名を扱っているのに対し、本発表では固有名という限定から離れて、詩において名づけるという行為のあり方を「呼びかけ」の構造に着目することを通じて主題とする。その際、対象となるのは、後期リルケの詩作品である。後期リルケ作品における「名づけ」の重要性はすでに先行研究でも指摘されており、とりわけフェレボルンが行った後期作品の分析を引き継ぐ形で、名づけ、呼びかけを論じる。

バッハマン同様に、リルケもまた名づけの困難さを意識しており、詩作品内でも対象に対する名前の無力さが表現されているのだが、他方『ドゥイノの悲歌』では詩作の意味が「言う」という簡潔な動詞で表され、そこでは日常的な事物の名称が羅列されている。こうした名づけえなさの意識と、名づける行為とは互いに対立し合っているように思われるが、まさにこの対立関係こそ、つまり、名づけがたいものを名づけようとする行為にこそ新しい言語表現の可能性が結びついているのではないか、というのが本論の問いである。そこで論拠となるのは、特異な統語論的な特徴をそなえた後期リルケ作品に頻出する呼びかけの構造であり、名づけえないものを詩の対象とすることで詩は語るのをやめるのではなく、むしろ名づけの不可能性を通して新しい別の仕方における名づけの可能性が与えられることを示す。

シンポジウムⅡ (10:00~13:00)

B会場 (103教室)

現代ドイツ文学 一境界の揺らぎ

Fluktuation der Grenzen in der deutschen Gegenwartsliteratur

司会：川島 隆

現代ドイツ文学を理解するための重要なキーワードの一つが、「越境」である。とくに1980年代以降、多文化主義政策を推し進めたドイツにあっては移民作家たちが次々と登場し、その存在はドイツ語圏の文学界に新たな刺激と活気をもたらした。移民のバックグラウンドをもつ作家が多くの読者を獲得し、もはや文学の傍流の地位にはとどまらず、(そもそも越境作家を対象としているシャミッソー賞以外の)名のある文学賞を受賞することも珍しくなくなりつつある。

複数の文化のあいだを「越境」する作家たちによる「越境文学」。その魅力はどこにあるのだろうか。たとえば第二次世界大戦やホロコーストといった巨大な歴史的な事件をじかに体験した犠牲者や加害者や傍観者、すなわち「大きな物語」の当事者であった世代が退場しつつあり、非当事者である第二世代・第三世代が同じ物語を語り直す(いわば縮小再生産の)営みに従事するしかないという状況に対して、「越境文学」は新たな当事者性のありかを示した。やや皮肉な見方をするなら、そうした文学の「越境性」は、今日の文学市場で商品として流通するうえでのセールスポイントの一つとなったと診断することもできるだろう。ドイツの移民政策が多文化主義から社会統合へとシフトするなかで、文化的な「越境」のイメージばかりが販促や話題づくりのために強調されつづけている、と言えは言い過ぎだろうか。そもそも「越境」とは、超えられべき境界線の存在を前提としてはじめて可能になる行為である。ドイツ人と外国人、男性と女性、オリジナルとコピー、高尚な文学と低俗な文学、文学と文学ならざるもの——などといった線引きが確固として存在しているときには、たしかにその境界を乗り越えることによって「越境」が実現するだろう。しかし、それらの線引きそのものが揺らいでいる場合はどうか。たとえば移民二世の子どもが、自分が両親のルーツとドイツ社会のどちらに帰属するか分からないとき。あるいは自分が男性と女性のどちらであるか確信がもてないとき。あるいは一つの文学作品が、オリジナルなのか他人の作品をコピーして切

り貼りしたものなのか判別がつかないときなど。どこまでが境界の此岸で、どこからが彼岸であるかが不分明であるときには、もはや「越境」は成り立たず、境界を越え出ようとする努力は方向喪失に陥るほかはない。

本シンポジウムでは、現代のドイツ語圏の文学において生じている、上記の意味での「境界の揺らぎ」の現象に着目する。取り上げられる事例では、いずれも何らかの形で「越境」が試みられていると同時に、その試みが単純に成功には至らず、かといって単純な失敗にも至らず、むしろ既存の境界線の引かれ方に疑問が呈され、また新たに境界線が引き直されるという事態が生じている。こうした事例に光をあてることを通じ、ひいては「文学」という制度の成り立ちと延命について再考してみたい。

1. ゼロ年代以降のドイツ小説における「語り」の文化折衷論

—S・レヴィチャロフとJ・ブラントにおける「高尚」対「通俗」

眞鍋 正紀

レヴィチャロフの『ナシトゲタルモノ』 *Consummatus* (2006) と、ブラントの処女長編『セカイとの衝突』 *Gegen die Welt* (2011) はともに、Pop文化がグローバルに浸潤した70/80年代の「現実」を描写する「語り」により構成されている。『ナシトゲタルモノ』の語り手、高尚文化を体現するラルフ・ツイーマーマンは、ヴェニスでの臨死体験後に生きる意味を見失って絶望に苛まれながらもPop文化にまみれた過去について「語る」ことで憂鬱を紛らして生き延びている。彼は、ゼロ年代以降の本格文学の在り方を擬人化した存在だ。他方、出自不明のテキストが寄せ集められた体裁をとる『セカイとの衝突』の編纂者かつ語り手の一人は、主人公ダニエル・クーパーの友人、彼を愛する同性愛者のフォルカー・メンクスだと示唆される。「世界」と折り合って生き延びるためなら同性愛や高尚文化への愛好を隠し、俗悪を含むあらゆる価値観を都合よく折衷・混交することも辞さない相対主義者の彼は、高尚・低俗のどちらにも専心しない「センスの良い」Pop文化を擬人化した存在だ。高尚と低俗への志向をはじめとした、さまざまな要因により「語り」そのものが「揺らぎ」を見せるが、その「揺らぎ」が「語り」のなかで自己言及される仕掛けが多様に展開されつつある点に、ゼロ年代以降のドイツ(のPop文学ならびに本格)文

学の特徴を見ることができる。

2. ネット時代の文学と「盗作」の問題

—ヘレーネ・ヘーゲマンの『アホロートルを轢き殺す』をめぐって

川島 隆

H・ヘーゲマンの『アホロートルを轢き殺す』*Axolotl Roadkill* (2010) は、17歳の作者が若者の性とドラッグの問題をリアルに描いた作品として大きな話題を呼んだ。しかし、この作品はほどなく、とある匿名ブログ作家の自伝小説からの大量の盗用を含むことがインターネット上で指摘された。これを受けてヘーゲマンは、「引用」の出典を明記しなかったことを謝罪する一方、「著作権の行き過ぎ」から脱却して「コピーと変形の権利」を認めるのが時代の要請であると開き直った。もとより、文学作品のオリジナリティをめぐる議論は、文学史において常に重要な位置を占めてきた (Theisohn 2009)。だが、文学という場へのネット社会の到来を象徴するヘーゲマンの盗作事件は、その状況に一石を投じたと言える。

本発表では、2000年以降のネット社会における、近代以降の文学という制度を支える「オリジナル／盗作」の線引きの揺らぎを扱う。また、そこで生じているのが単純なパラダイム転換ではなく、従来から文学を規定してきた制度的枠組みがメディア環境の変化に適応して組み直されるプロセスであるという側面に着目することで、現代ドイツ文学の現状を過去との連続性と不連続性において捉えるための視座のサンプルを提供する。この手続きを通じて、「オリジナル／盗作」の境界をめぐる言説が、ある特定の作家を「天才」と位置づける言説と表裏一体をなしつつ文学という制度を成り立たせてきたことを明らかにしたい。

3. 「故郷」を再現する物語

—メリンダ・ナジ・アボニィ『鳩は飛んでいく』

麻生 陽子

1990年代以降、あらたな文学的創造力をもつ存在として登場し、いまやドイツ語圏の文学の主たる一翼を担っているのが、多言語的な経験をもつ移民の作家たちである。こうした非ドイツ語母語話者として初めて、2010年、当時無名だった、スイス在住のハンガリー系セルビア人メリンダ・ナジ・アボニィ(1968-)の伝記的な長編小説『鳩は飛んでいく』*Tauben fliegen auf* (2010)がドイツ書籍賞に選ばれた。しかし、彼女の音楽的な話し言葉に注目した各紙も、「自明なことを読むに値する文学として仕上げた」作品と評したように、その主眼は、テーマの斬新さとは対極の事柄にある。

本作は、セルビア北部ヴォイヴォディナからスイスへと移住する一家のサクセスストーリー。語り手イルディコーという娘の目線から、親世代の苦労話や言語習得の問題など、移民文学にお馴染みの素材が横糸や縦糸として編まれていく。ハンガリー語やドイツ語と自由に戯れながら、幼少の記憶を掘り下げていく過程で、彼女は「故郷」が何たるかを自覚する。二つの場所で二つの時間が動き出す本作は、語りによって「故郷」を再現する物語といえる。

美化され、感情的にも肥大した「故郷」という伝統あるトポスを問い直す本作は同時に、家族史小説、娘たちの小説でもある。こうした多様な側面にも目配りすることで、地理的、言語的な越境に意識的な作家の存在が珍しくなくなった現代における「移民文学」についても考察したい。

4. アルカヘスト、造形芸術と言語芸術の融和

—キーファーとランスマイアー

徳永 恭子

造形作家アンゼルム・キーファーの作品には、芸術ジャンルの境界を越え、文学から引用した作品群がある。引用される作家としてはツェラン、バッハマンの他に、現代作家クリストフ・ランスマイアーが挙げられる。キーファーと三人の作家の共通点はドイツ語圏から外に出て、外からドイツの過去と取り組

んだことである。しかし主体的な「境界」の乗り越え、越境した場からの過去への取り組み以外にも何か共通点はないだろうか。

昨年出版されたキーファーの画集『アルカヘスト』にはランスマイアーの詩が添えられている。「アルカヘスト」とは錬金術の用語で、あらゆる物質を元素へと溶かし、新たな結合を生み出す溶解剤のことである。キーファーとランスマイアーの作品が融合され生み出された『アルカヘスト』が描き出すのは山の風景だ。この画集を元にしてキーファーとランスマイアーの親和性を探る。その際、造形芸術家と作家が好んで用いる素材、鉛と鉄に着目する。鉛や鉄は「重さ」を特徴とするだけでなく、硬直性とは無縁の流体性でもってメタモルフォーゼの象徴ともなる物質である。「重さ」の元にある溶解性、流動性は現代を象徴するものといえるのではないだろうか。軽やかなポップ芸術とは一線を画する現代芸術として両者の作品を位置付けたい。

口頭発表：文学 I (10:00~12:35)

C会場(210教室)

司会：友田 和秀、宇和川 雄

1. 『パルチヴァール』におけるガーヴァーンの自律性と triuwe

松原文

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール』において、作品後半の筋を主に担うのはアルトゥース王の甥ガーヴァーンである。しかしこの副主人公ガーヴァーンに関する研究の重要性はこれまであまり顧みられず、パルチヴァール像や聖杯や救済の問題を論ずる研究の蓄積とは歴然たる差がある。またガーヴァーンは、無知ゆえに罪を犯すパルチヴァールとは全く対照的に徳高い理想の騎士と評価されており、そのような人物評価に対する留保や疑義を論じようとした研究はごくわずかである。

本発表はガーヴァーンの物語、とくに第十三と十四巻のヨーフランツェの場面、すなわち、ガーヴァーンが魔法の城に囚われていた人々を解放し、アルトゥース王宮廷と再会を果たす場面を扱う。宮廷は人々の再会に沸きたち、華やかな祝祭が催される。だが実はその一方で、ここまで騎士の華とされてきたガーヴァーン像が大きく揺れている。彼のために無用の戦いが生じ、また彼自身も、妹の恋人であると同時に自分の恋人の仇敵であるグラモフランツ王との一騎打ちに向かって突き進み、誠(triuwe)を失いかけたのである。

誉れとミネの獲得を目指す騎士の行動原理が、潜在的に死や悲しみと結びついていることはよく指摘される。だが本考察を通してヴォルフラムの主張はより鮮烈で挑戦的であることが確認できるだろう。『パルチヴァール』においては、もはや誉れもミネも絶対的で固定の価値を持たず、人々は伝統的な定型の人物像から離れ、不確定性の中で独自の動機や行動様式を持ちうるようになったのだ。

2. L. ティーク『ツェルビーノ王子』における

メタ・メタフィクションの可能性

山田 よしこ

ティークの喜劇『ツェルビーノ王子』(1798)は、一般に、代表作『長靴を履いた牡猫』(1796)の付随的な「続編」とみなされ、ドイツでも先行研究が少ない。しかし『ツェルビーノ』は『牡猫』の登場人物の一部を引き継ぐものの、筋展開の上での単なる「続編」にはとどまらない。『牡猫』のメタフィクション性を推進している点で注目に値するのだ。『牡猫』は「長靴を履いた牡猫」という同名の劇を観ている観客をも戯曲内に取り込み、かつ劇中劇の枠外と枠内が厳密に分かたれず互いに交流しあい、「劇の上演」の自己言及をパフォーマンスに行っている。これに対して、『ツェルビーノ』は初めから、自らが虚構であるという劇中人物たちの自意識を前面に出し、ティーク自身の作品を含む同時代文学をパロディー化しながら、徹底して「紙に書かれたこと」に言及する。その上で『牡猫』テキストの上演をも自らの内に書き込んでおり、よりメタフィクション性を深化していると言える。ところが、例えば研究者シュトロージュナイダー＝コールスは、両作品の緊密な関係を認めつつも、ロマン的イロニーの実践の観点から、第六幕の劇中人物による「戯曲の巻き戻し」場面を除いて劇的緊張が欠けているとして、『ツェルビーノ』を下した。本発表では、こうした評価が一面的であることを示すべく、『ツェルビーノ』における、虚構への自己言及および「書くこと」の試みと失敗に着目していき、ティークのいう「続編」の意味を考えてみたい。

3. 挿入される経験

—ギュータースローの長編小説におけるエッセイイズムについて

桂 元嗣

ギュータースローの『太陽と月』(1962)は物語の進行を妨げる脱線や語り手の考察が脈絡なく挿入される。彼の弟子を自認するドーデラーはこれをミュージル以上に物語る意志を欠いた「抽象への陶醉」と批判した。ロマン空間を破壊する挿入が意図するのは何か。『太陽と月』を中心に、ドーデラーやミュージル

と比較しつつ明らかにする。

ドーデラーは「アテネ講演」(1954)で1918年以前と1945年以降のオーストリアの歴史的連続性を指摘する。彼によると戦後オーストリアの再生には非物質的(immateriell)な伝統との接続が不可欠である。こうした見解は一種のハプスブルク神話であり、彼のロマンが叙事的に描きだす歴史空間も現実との接点を欠いた空虚さを免れない。一方ギュータースローにとって作品は「ロマンに偽装された自伝」である。彼は自己の内面に沈潜して小さな物語を見出し、それを鏡に幾世代にも渡る大きな物語との連関を捉えようとする。ただし『太陽と月』で構築される神話的空間は経験に根ざした物質的(materiell)な自伝的空間と常に拮抗する。ここにドーデラーとの違いがある。

『太陽と月』の中心概念は「質料学 die Materiologie」と呼ばれる。あらゆる個体・集合体を還元不可能な要素にまで分解することで現在と過去をひとつにする試みだが、ギュータースローは小説空間を分解する脱線や挿入を繰り返すことで、それぞれの統一体の思考に内在する還元不可能な経験をとり出そうとする。こうした試みはドーデラーよりもむしろエッセイを書く「私」と書かれたエッセイの「私」との差異に厳密であろうとするムージルのエッセイismusと共通している。

4. マックス・フリッシュ『学校のためのヴィルヘルム・テル』における Rechtの所在

寺澤 大奈

スイス人作家マックス・フリッシュの小説『学校のためのヴィルヘルム・テル』(1971)は、テル物語の史実性が作品成立時にはもはや信じられていなかった状況に鑑みると、スイスの建国神話を否定する試みというよりはむしろ、これを相対化しさらに再構築する試みとして捉えることが妥当である。本発表ではこの試みの具体的な実践例を、作品中に複数回登場する **Recht** (正しさ、権利、法) およびその関連概念に照準を合わせて考察する。相対化ならびに再構築の手段は多岐にわたるが、語りの視点の問題はその重要な一例であろう。下敷きとなったシラーの『ヴィルヘルム・テル』がどちらかといえばスイス寄りの立場を取るのに対して、本作品では一貫してハプスブルク家の代官の視点か

ら物語が描写されるが、このような視点の転換はそのまま **Recht** の所在の相対化を意味している。さらには本作品の特徴とされる作者による大量の註には、この相対化された **Recht** をいわば客観的・学術的な体裁で再設定しようとする企図がうかがわれる。すなわちスイス建国神話の相対化と再構築は、視点の転換と学術的な註という手段を通して、スイスからハプスブルク家へと **Recht** を譲り渡すプロセスとして捉えることができよう。このほか本発表では作中における **Recht** の概念をさらに詳細に分析するべく、**Freiheit** 概念との比較検討や宗教をめぐる問題性、スイスの国是である中立性との接点、共同体内における異端者としてのテルの立場などもテーマとして取り上げる予定である。

口頭発表：ドイツ語教育 (10:00~12:35)

E会場 (203教室)

司会：田原 憲和、鈴木 智

1. Digitale Hilfen für das Schreiben in sozialen Netzwerken

—eine Brücke zwischen formellem und informellem Lernen

Ikumi Waragai

Marco Raindl

Tatsuya Ohta

In der Diskussion über das Lernen wird immer wieder auf die Bedeutung informellen Lernens im Alltag verwiesen sowie auf das Potenzial mobiler digitaler Lernumgebungen dabei, einen Brückenschlag zwischen formellem und informellem Lernen zu leisten. Im Vortrag werden der theoretische Hintergrund des Projekts, die didaktische Gestaltung der Lernumgebung *d-assist* und die Ergebnisse ihrer empirischen Erprobung vorgestellt.

Die Lernumgebung knüpft an die Alltagserfahrungen von Deutschlernenden (B1-Niveau) bei einem Kurzaufenthalt im deutschsprachigen Raum an, verbindet diese mit bereits Gelerntem und ermöglicht es den Lernenden, sich in der Zielsprache mitzuteilen. Es handelt sich um eine Zusatzfunktion für Facebook, die Geolokationsdaten von Fotos nach situativen Inhalten analysiert und Lernenden für das Verfassen von Facebook-Postings sprachliche Hilfen anbietet. Grundlage sind Wortschatz, Sätze und Textblöcke aus dem kurstragenden Lehrwerk, sowie bearbeitete Blogtexte anderer Studierender. Die Lernumgebung erschließt den Lernenden ihre Online-Community als einen Raum, in dem sie die gelernte Sprache mitteilungsbezogen erproben können. So können Lernende Erfolge beim schriftlichen Gebrauch ihrer Zielsprache erleben, die sich in gesteigerte Lernmotivation umsetzen können. Weiterhin eröffnet sich die Möglichkeit, dass die Lernenden auch nach ihrem Abschluss den Austausch in Sozialen Netzwerken als Lernressource nutzen.

2. Videokonferenzen im Oberstufenunterricht

—Möglichkeiten und Grenzen studentischen autonomen Arbeitens

Andreas Riessland

Aufbauend auf Erfahrungen aus fünf Jahren japanisch-deutscher Videokonferenzen im universitären Fremdsprachenunterricht geht dieser Vortrag auf ein bezeichnendes Merkmal dieses Kommunikationsmediums ein: das große inhärente Potential der Videokonferenz zur Förderung autonom gestalteter Lern- und Arbeitsprozesse bei den studentischen Teilnehmern.

Eine erfolgreich durchgeführte Videokonferenz verlangt von ihren Teilnehmern in allen ihren Phasen (Vorbereitung, Durchführung, Aufarbeitung) ein hohes Maß an Leistungsbereitschaft und persönlichem Engagement. Andererseits bietet sie ihnen ein Erlebnis im kulturellen und sprachlichen Austausch, das fast ausnahmslos als sehr positiv und motivierend wahrgenommen wird (siehe u. a. Hoshii/ Schumacher 2010 und Riessland 2011).

Mit dieser Kombination aus hohen Arbeitsanforderungen einerseits und großer persönlicher Befriedigung andererseits rückt die Eigeninitiative der Teilnehmer sehr in den Vordergrund: Die Bereitschaft zur Leistung speist sich primär aus den Erwartungen innerhalb der Gruppe und dem Wissen um die Verantwortung den Partnern gegenüber. Die Rolle der Lehrkraft hingegen reduziert sich primär auf Betreuung des technischen Bereichs und beobachtende Begleitung.

Doch auch diese Form des autonomen studentischen Arbeitens hat ihre Grenzen: Das befriedigende Erlebnis der erfolgreichen Kommunikation als solches, so zeigte sich, ist nur in Ausnahmefällen als Motivator für ein langfristiges Engagement ausreichend. Letztendlich, so die Einsicht aus diesem Projekt, bleibt die Einbettung in einen formalen Rahmen unerlässlich.

3. 日本語を母語とするドイツ語学習者の語順習得
—処理可能性理論と発話の複雑性から

星井 牧子

ドイツ語の語順習得に関しては、Pienemann (1998) の処理可能性理論 (Processability Theory, PT) により、「枠構造 (SEP)」 < 「主語と定動詞の倒置 (INV)」 < 「副文における定型後置 (V-END)」 の習得順序が提唱され、Grießhaber (2010) の Profilanalyse でも同様の順序が用いられている。他にも学習者の母語にかかわらず PT と同様の習得順序が数多く報告されている (vgl. Ahrenholz 2008; Grießhaber 2010; Lee 2010, 2012; Meerholz-Härle & Tschirner 2001; Tschirner 2004)。しかし調査によっては、V-END が INV より先に習得されるという結果もあり (Diel et al. 2000)、報告者が日本のドイツ語初学者 (大学 1、2 年生) を対象とした調査でも、V-END が先に習得され、学習者が chunk としての使用を離れて自由に文を構築しはじめると INV の正確性が下がる可能性が示唆されている (Hoshii 2010)。

こうした先行研究を踏まえ、本報告ではドイツ語習得順序を発話の複雑性の観点から再考察することを試みる。調査対象は日本語を母語とする中級レベルのドイツ語学習者 (大学生、29 名) で、授業で課した作文と授業内でのドイツ語話者との会話場面 (テレビ会議) の発話を用いた。作文データから、定動詞の位置に関するエラーの 6 割は INV に関するもので、前域に副文が現れるなど文構造の複雑性が高いことが明らかになっている。同様に、発話データでも INV に関するエラーが多いことが観察されている。本調査では横断的研究手法を用いたため、そのまま PT の習得順序が否定されるわけではないが、発話の複雑性を考察に加えることで、ドイツ語の習得順序を再検討する可能性について考察したい。

4. 教養ゼミナール「ドイツ環境ゼミ」の現状と今後

松岡 幸司

多くの大学で、外国語教育における英語偏重の傾向はまだ続いている。その中で「なぜドイツ語 (第二外国語) なのか?」という問いに対する答えの一案

として、報告者は「ドイツ環境ゼミ」という授業を行っている。この授業は「ドイツ語研修+現地で環境に関する視察・調査を行う」ドイツ研修を中心に据えたものである。本報告では、「環境」という分野では先進国であるドイツの言語を用いて環境問題を考える、という形式の授業の成果を報告し、その今後の展望を示しつつ、このようなタイプの授業を展開していくことについて、会場の参加者と共に考えたい。

このような学習プログラムの開発は、今後の大学における外国語教育（特にグローバル人材の育成という点）においては大きな意味を持つことになると考えられ、今後の大学におけるドイツ語教育において新たな展開を期待できる反面、実施に際しての課題（問題点）を合わせ持っている。つまり、報告者は環境関連の授業担当も可能であることからこのようなゼミを開講しているが、一般のドイツ語教員にとってはどのような分野に焦点を当てた複合型授業が担当可能であるのか、あるいはどのような異分野の教員との連携が可能であるのか、という点が問題となってくるであろう。また、どのようなカリキュラムの一部として位置するか、ということも問題である。そのような問題点についても、会場の参加者と共に検討したい。

ブース発表 I (11:30~13:00)

F会場 (207教室)

イタリア・南チロルにおけるドイツ語教育
—ラディン語地域における複言語教育を中心に

小川 敦
境 一三
大澤 麻里子

ラディン語地域はイタリア国内で3つの県にまたがる。特にドイツ語話者が多く住む南チロル地方のラディン語地域では、ラディン語母語話者である住民の多くが話題や相手に応じてラディン語、ドイツ語、イタリア語を自在にコード・スイッチングする。彼らが3言語を操れるのは当地域独自の言語教育システムによるところが大きい。本発表では、歴史的な経緯を概観した上で、本年3月の発表者による St.Ulrich (Ortisei) の現地調査に基づき、言語教育の具体的な方法を提示し、3人がそれぞれ専門的な知見から分析を加える。特に、ラディン語とイタリア語はどちらもロマンス語であるため習得しやすいことが想定されるが、なぜ当地域においてドイツ語がほとんど母語のように用いられるのか、なぜ3言語同時に行う識字教育が成果をあげているのか、これらの要因や背景を明らかにするとともに、複言語主義のあり方について、欧州言語共通参照枠 (CEFR) の概念などを用いて説明を行う。ラディン語圏以外の南チロルの学校は独伊の言語別に分かれており、他の言語グループと接触する機会は限られ、言語グループ間の分断が指摘されてきた。しかし、近年はラディン語地域の言語教育の手法を一部取り入れ、ドイツ語・イタリア語のバイリンガル教育が実験的に行われはじめている。ラディン語地域の取り組みは、このように地域を超えて広がっており、EU市民の複言語・複文化能力養成の方向性を探る上での重要な手がかりとなるだろう。

ポスター発表(13:00~14:30)

G会場(209教室)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

想起する帝国

—ナチス・ドイツにおける「集合的記憶」に関する考察

溝井 裕一

細川 裕史

齊藤 公輔

本グループは、「集合的記憶」の概念を第三帝国に適用し、集合的な「過去」のイメージが、ナチスによっていかに利用されていたかを考察する。

まず齊藤は、ヒムラーによってその意味付けを変化させられたクヴェトリンブルクの聖セルヴァティウス教会をとりあげる。従来、マスメディアと集合的記憶の関連が注目されてきたが、今回は「建築物」をメディアとしてとりあげ、記号の剥奪と付与が集合的記憶の変化に寄与することを明らかにする。

ついで細川は、ナチスの言語運用と集合的記憶の関係について論ずる。クレンペラー(1947)以来、「第三帝国の言語」は教会の説教やロマン主義の言語を想起させると主張されてきた。しかしながら、高田(2014)は、第三帝国の言語に関して、同時代人の抱いていた印象および現代人のもつイメージと実際の言語運用に、乖離がみられることを指摘している。そこで一次資料に基づき、教会およびロマン主義の言語と第三帝国の言語との相違点について調査を行う。

最後に溝井は、ナチスがとりくんだ絶滅動物復元計画の背景にある、「ゲルマン的自然の記憶」について考察する。アルティンガー(1994)、溝井(2014)らを通して、この計画の概要は明らかとなっているが、それは古代生態系を甦らせるというより、ナチスの思い描く生態系を構築することに眼目があった。そこで、これに携わったL・ヘックの著作をもとに、彼らが理想とした自然をめぐる「過去のイメージ」について論じたい。

ドイツ語における浮き彫り付与
—物語における前景・背景と boundedness

舟本 正太郎

本発表の目的は、ドイツ語の物語においてどのような言語的特徴が前景と背景の分類にとって重要であるのかを明らかにすることである。

Harald Weinrich によれば、物語においては主文が前景（主な筋）、副文が背景（補助的情報）を示している。仮に前景を「物語の主要な時間軸上で起こる連鎖的な事態」、背景を「時間性・連鎖性とは必ずしも関係ない補助的情報」と定義するなら、主文が前景で副文が背景という説に対する反例をいくつも挙げることができる。フランス語を中心としたロマンス語や英語の前景・背景に関する研究が豊富であるのに対し、ドイツ語に関するものはわずかであり、ロマンス語の完了過去と未完了過去による前景・背景の分類に基づいて *Aktionsart* をよりどころとしている研究がいくつか見られるのみである。ただし、*Aktionsart* は名称や定義が一定していない等の問題を抱えた概念である。

そこで本発表では「行為・状態が時間的境界に達したものとして描かれている」か否かに関する概念である boundedness (Declerck 1989) を利用し、ドイツ語の物語作品内の文章を bounded な文とそうでない文とに分類する。そして bounded な文が前景部、unbounded な文が背景部に当たることを明らかにする。さらにフランス語訳の参照が可能な作品に関しては、単純過去（完了過去）と半過去（未完了過去）の分類との比較も行う。

シンポジウムⅢ (14:30~17:30)

A会場 (102教室)

中世ドイツ文学における「愛」の諸相

—「ミンネ」が文学テーマ化された意味を求めて

Aspekte der Liebe in der deutschen Literatur des Mittelalters

—Zur Relevanz der literarischen Thematisierung der *minne*

司会：嶋崎 啓

12世紀後半における中世ドイツ宮廷文学の開花・隆盛と軌を一にして、男女の愛が文学テーマ化され、それを美的に表現するさまざまな可能性が追求された。この文学的革新は、一方で古代ギリシャ・ローマ文化を受容しながら、他方で封建制とキリスト教を基盤とする新しい宮廷文化の中で「愛」が儀礼化され理念化されて成立した。中世独特のこの理念は「ミンネ (*minne*)」という語に集約されるが、その意味付けは多様である。文学的私闘にまで発展した「高きミンネ・低きミンネ」の対立や、叙事詩、抒情詩、教訓文学などのジャンルの違いによるミンネの表出パターンの差異、また更には個々の詩人のミンネ解釈の相違や詩人の個性の違いは、ミンネの意味や文化史的イメージを固定化しない働きをした。

20世紀以降のミンネ研究は、1950~60年代の精神的・イデオロギー的解釈、70年代以降の社会学的解釈、心理学的解釈、そして近年の人類学的・心的傾向史解釈という流れの中で、時代の研究動向に左右されながらも、ミンネの共通理念を導き出そうとしてきた。これらのミンネ解釈は、文学的現象と社会的実情との表象関係を前提としつつも、ミンネの表出パターンを「共同体ゲーム」というひとつの貴族社会の交際形式の枠内に留めてしまい、従って、逆説的ではあるが、ミンネを現実社会から離れた文学的現象のうちに閉じ込めてしまう危険性を孕んでいた。さらに近年の研究においては、ミンネの共通性を認めながらも、文学ジャンルの差異や詩人・作品の個別性を重視し、ミンネを地域・時代による局地的かつ個別的現象として解釈する傾向も見られる。

本シンポジウムは、こうした従来のミンネ研究を踏まえて、ミンネ概念の再理解を試みる。その際、ミンネの言語史的な語義分析を足掛かりに、まず「高きミンネ」をテーマに、「高きミンネ」が本質的に矛盾を内包し、ミンネゼンガーたちがこの理念に懐疑を抱いていた可能性を指摘する。次に、ミンネの宮廷

性をテーマに、ミンネザングの舞台が農村に置かれる場合も、農村は宮廷と対立するのではなく、宮廷的共同体の広がり的一部であって、ミンネがあくまで宮廷の枠内にあることを論じる。そして更に、ミンネと表裏一体となった「誠実 (triuwe)」の変遷をテーマに、叙事詩の登場人物の誠実における主体性が時代の流れの中で強まるとともに、ミンネが内面化していくことを主張する。最後に、キリスト教的倫理観から見たミンネをテーマに、叙事詩の主人公たちがキリスト教的倫理に反するミンネを体現する一方で、準主人公ともいべき人物たちがキリスト教にかなうミンネを具現化することを扱う。このようにミンネの諸相を提示しながら、その多様性を単に文学ジャンルや時代、地域、詩人の違いに還元するのみではなく、むしろその多様なすべてが「ミンネ」という共通の文学テーマに包括され得た意味を問いたい。

1. 文学テーマ化される前の minne の語義

嶋崎 啓

通説では minne の原義は「思い、思い出」であるが、先行研究が指摘するように、古高ドイツ語において minna は「思い、思い出」を表さず、すでに「愛」、「好意」、「友好」を意味した。従って、中高ドイツ語文学における minne の意味を考える上で重要なのは語源ではなく、minna/ minne がどのような「愛」を意味したかということである。そう考えたとき、「愛」が文学テーマ化された際に選ばれたのがなぜ liebe (> Liebe) ではなく、minne であったのかを問うこともできる。その観点で古高ドイツ語の minna を見ると、minna は、中高ドイツ語で表されるような高い価値を持つ理念的な「愛」の意味をすでに備えていたと同時に、そこではまだ男女の「愛」に焦点が当てられる形で理念化されてはいなかったことが分かる。また、minne と同様に「愛」を意味しながら、liebe が文学的な理念として選ばれなかった理由については、minne と liebe の優勢な地域の違いという言語地理的な状況に求めることもできる。しかし、本発表では、動詞 minnen と lieben の意味に注目し、minnen が lieben とは異なり主語の能動的な行為としての「愛」を意味することが、「愛」が文学テーマ化される際に、能動的、主体的な「愛」を意味する minne が選ばれることにつながったことを述べたい。

2. 「高きミンネ」に対するミンネゼンガーの懷疑

—モールンゲンとヴァルターのミンネザングを例に

伊藤 亮平

ミンネザングの主要なテーマである「高きミンネ」は、報われないにも拘らず女性に愛を捧げるという矛盾を本質的に孕んでいる。ミンネゼンガーらは女性奉仕を通じて、己の精神向上を図ることを奉仕の目的にしているということが従来指摘されている。しかし「高きミンネ」は当時から一様に受容されていた訳ではない。ヴァルターは次第に「高きミンネ」に対し批判的となり、「低きミンネ」や「対等のミンネ」を提唱し、さらにはリート L66、21 において、これまで己が述べたミンネを否定するというように、彼の「ミンネ」概念には変遷が見られる。

己の精神向上という理由は、一見すると「高きミンネ」を合理的に説明しているように映る。しかし、ミンネをより精神的なものへと昇華させつつも、所謂プラトニックな愛へ至ることなく、女性奉仕の最終的な目標を依然として女性との愛の成就に求めているため、結果的に「高きミンネ」が孕む矛盾は解消されていない。そのため、ヴァルターに限らずミンネゼンガーらは「高きミンネ」を積極的に受容する半面、「高きミンネ」に対する懷疑を常に抱えていたのではないか。本発表では、「高きミンネ」を積極的に受容しているかに見えるミンネゼンガーに内在する、「高きミンネ」に対する懷疑を、盛期ミンネザングの代表的な歌人の一人であるモールンゲンのミンネザングを例に、ヴァルターとの比較を通じて考察し、「高きミンネ」の受容の揺れを検討したい。

3. ナイトハルトのミンネザングにおける「宮廷」の役割

田中 一嘉

ミンネザングは宮廷社会の芸術であり、宮廷的交際手段のひとつと考えられているが、詩人ナイトハルトはミンネを謡う際、「農村」を舞台とした。これまでのナイトハルト研究では、作品の受容者が宮廷人である限りにおいて、農村と農民(田舎者)の滑稽な描写は、宮廷人たちの墮落した姿を投影したものであり、それを暗に批判していることが指摘されている。ただし、彼のミンネ観

はミンネザング最盛期の詩人ラインマールの「高きミンネ」概念に近く、ミンネの理念自体が否定されているわけではないだろう。

そこで本発表では、ミンネが語られ、実現される「場」の持つ役割を明らかにする。まず、宮廷(的なもの)に関して言及されている箇所を分析することで、ナイトハルトにとって宮廷の表象の持つ意味を読み取っていく。また、「高き・低きミンネ」の論争において、とりわけヴァルターに顕著だが、ミンネの対象である女性の地位、あるいは心的在り方が問題とされる。ナイトハルトの場合、この点についてはミンネについての母娘間の会話から分析する。

この二点の考察から、ナイトハルトの描く世界観が宮廷 vs. 非宮廷(農村)という二項対立の図式によって構成されているのではなく、農村は宮廷社会と連続する周縁部として理解されること、そしてミンネの中核概念の適用範囲もまた宮廷という場にその軸足を置いているが、同時に四方に拡散しうる可能性も秘めていることを明らかにしたい。

4. minne(愛)における triuwe(誠実)の問題について

—『エネアス物語』と『トリスタン』を中心に

渡邊 徳明

ゴットフリートの『トリスタン』では愛における「誠実」の重要性が強調される。それは無論のこと、愛する相手に対する気持ちが変わらぬことである。しかし事は単純ではない。トリスタンは恋人である金髪のイゾルデと、正妻となる白き手のイゾルデに対して誠実であらねばならない。その両方の誠実を同時に満たすのは難しく、葛藤が生じる。このような誠実についての問題は、二十数年前にフェルデケによって書かれた『エネアス物語』においてどのように扱われているのだろうか。たとえば顕著な違いとして『エネアス物語』において男女は一緒に居なければ誠実さを証明できないのであるが、『トリスタン』においては男女が会えなくても心の中で思い合っていれば誠実が成り立ちうる、といった点が挙げられる。総じて後者では愛における誠実の在り方に対する意識が強まり、誠実の概念も内面性・多義性を増す。また前者において愛の行方は神が定める運命によって決まり、主人公のエネアスはマリオネットのようにすら見える。それに対して後者では、男女の愛が目に見えぬ心の奥でいつの間

にか生まれているようにも見える。つまり前者では自らの意志で誠実であろうと自主性を発揮できる余地が限定されている。それに対して後者ではむしろ、「男女の間の愛の行方は神が定めた運命によって決まったのだ」と責任転嫁できぬところに先進性がある。

5. 準主人公に映し出されるキリスト教的ミンネ理想像
—『ヴィレハルム』のギュブルク（アラベル）と
『散文ランスロット』のガラートを例に

浜野 明大

ミンネザングの「ミンネ」がミンネゼンガーから直接的に表現されるのに対して、中世叙事詩の「ミンネ」は、「語り手」「主人公」「準主人公」などを通じて描かれるために、ミンネザングのような *Intensität* (集中性) がない。その形は多種多様であるが、総じて「不倫」「復讐」「近親相姦」「騎士の栄誉優先」というような、キリスト教倫理観と照らし合わせると、道義的に問題性を孕んだ「ミンネ」を主人公が体現している例が顕著と言える。

一方で、キリスト教的ミンネ理想像が描かれている中世叙事作品も存在する。しかし、この「ミンネ」は主人公に直接ではなく、物語の中で非常に重要な役割を担う準主人公に映し出される、という間接的な手法で描かれており、その一例として『ヴィレハルム』と『散文ランスロット』に登場する二人の準主人公ギュブルク（アラベル）とガラートの「ミンネ」が挙げられる。

本発表では、キリスト教的精神にとって理想的な「ミンネ」が、主人公の「ミンネ」よりも準主人公の「ミンネ」によって具現化されているという中世叙事詩における「ミンネ」の「語りの技法」の一例を示すことによって、「高きミンネ」と「低きミンネ」という二元的な従来の伝統議論に留まらず、より多元的な「ミンネ」の側面の可能性を提示したい。

シンポジウムⅣ (14:30~17:30)

B会場 (103教室)

もっと正義を!

—詩的道德を希求する文学の格闘

Mehr Gerechtigkeit!

—Das Ringen der Literatur um die poetische Moral

司会: 香田 芳樹

正義とは元来「約束」の上に成り立つ産物であった。当事者たちの相互利得のために結ばれる契約が倫理を形成しており、それゆえ正義は何より国家や市民社会といった、限定的な契約者間の関心事であった。現在ならただの宗教テロでしかない十字軍に中世ヨーロッパ人が十分な正当性を認めたのは、彼らがキリスト教の紐帯で堅く結ばれていたからである。正義は契約者間で生じる「利得」であり、「他者の正義」は存在し得なかった。しかしこうした正義論は、今日修正を迫られている。たとえば自国民を大量に虐殺しているシリアの独裁政権に反対して、フランスやアメリカが反政府勢力を援助することは、主権国家の同意がない以上、本来は国際法違反のはずであるが、人道的見地から正義の遂行とみなされる。

「正戦」*gerechter Krieg* を巡るこうした解釈の逆転は、現代社会において正義の根幹をなすのがもはや契約ではなく、「他者の善へのたくましいコミットメント」(ヌスバウム) となりつつあることを示している。奴隷制を撤廃させたアメリカ人は、結果として公正性の実現に貢献したが、その原動力となったのは他者のもつ善への理解ある眼差しであった。つまり歴史的形成物である法体系を、正義の根拠にすえるのは実は主客転倒で、法を善良な社会の基準とさせた、目に見えない感性と慣習の集合体が太古から長い時間をかけて形成され、それがいわば「神話」のように人間世界を公共化してきたと考える方が自然なのである。

詩的情感と正義の関係に注目した哲学者にマーサ・ヌスバウムがいる。彼女の提唱する「詩的正義」*poetic justice* は、古代から今日まで文学作品が正義を社会に提示し、それゆえそれぞれの時代の規範的価値と批判的に対峙しているという洞察である。確かに、レッシングもクライストもビュヒナーもカフカもブレヒトもマンも、ソフォクレスもシェイクスピアもユーゴーもドストエフス

キーも、既存の法によって不当に虐げられる人々を描いた。彼らにとって文学とは、立法化されえない真の正義の存在を読者に予感させ、その実現を促すための手段であった。文学の形象性を通してこそ、生命の価値や、人間の尊厳や、自由や、愛や、平等といった正義の基本的構成要素は具体的にイメージされ、「人格の公共的構想の一部」(ヌスバウム)となりうる。

本シンポジウムの目的はこうした観点から、既存の法や社会道徳との対決の中で生まれた、正義を希求する精神活動としての文学の存在を、古代から現代に至るまで歴史的に概観することである。

1. プラトン『ポリテΙΑ』における詩的正義の可能性とホメロス叙事詩

古澤 ゆう子

ブルーノー・スネル『精神の発見』は、古代ギリシアに於ける **Mythos** から **Logos** への進展に、人の精神が段階をふんで発展する「啓蒙の弁証法」、ヨーロッパ的 **Denken** の成立をみるが、プラトン『ポリテΙΑ』の詩人追放論をこの枠組みで解釈することはできない。正義が魂とポリスの類比という論法において吟味されるこの著作では、**Logos** を理にかなった論で真実を認識する能力と評価する一方、**Mythos** には具象に固執して混迷や誤りをもたらす危険を見る。それゆえ理想国家から物語の作り手、すなわち詩人たちにお引き取り願おうと言う。ところが同書の別の箇所では **Mythos** の教育への効用を認め、『法律』では「真実の泉」であるとさえ言う。のみならずソクラテスに輪廻転生神話を語らせ、他の哲学対話篇でも重要な **Mythos** によって思想を展開する。一見矛盾であるが、プラトンの批判は実相の二重模倣技術を芸術とみなす芸術理解に向けられており、ものの本質の判別把握を助ける芸術の可能性を否定しない。ただし詩文は個物の表象であるがゆえに、真実や善や正義そのものを描くのではなく、正しい評価を提示するものでもない。アキレウスの残虐な怒りを主題に戦士たちを歌うホメロス叙事詩『イーリアス』において、彼らの言動に作用する知性や意志や欲望のありかたは、プラトンの説く魂の構造や作用と同じ理解を示すものが見て取れ、彼の「詩人追放」が、哲学的合理化や非神話化と捉えられないことを意味すると考える。

2. 「正義の女神は堪え忍ぶものに秤を傾ける」

—ドイツ中世叙事詩に描かれた復讐と法

香田 芳樹

本発表の目的は、ヨーロッパの「正義」概念が特殊な発展を遂げて、ドイツ中世後期の叙事詩文学に定着したことを明らかにすることである。そのために中高ドイツ語の *rât* に焦点を当てる。現代ドイツ語では主に「助言」を意味するこの語は、中世期には法学や神学におよぶ、広い意味野を有する概念であった。*rât* の文献学的考察を通して、この語が民族の神話的土壌から生まれた、特殊な法(掟)を表現していたことを明らかにする。*rât* は部族社会が宮廷社会に吸収される過程で、(ge)reht の背後へと後退するが、公的秩序の維持に不可欠な不文法として存在し続けた。それは民族の「蓄え」であり、危機を回避するように告げる「声」であった。

この二つの正義の葛藤は、アリストテレスが名づけた、「配分的正義」と「交換的正義」との間の緊張関係で説明することができる。人知を越えた方式で配分される正義は必ずしも「公正」ではないが、神権国家には必要である。しかし個の意識の成長とともに算術的な公正さがより良い正義とみなされるようになり、それを阻害するものを排除することが正当化される。中世において「復讐」という文学主題がとりわけ好まれたのは、正義が交換可能になり、そこに人々が詩的正義の発現を見出したことによる。しかし同時に文学は、復讐が生む暴力の連鎖を断ち切るための提言もしなければならなかったはずである。こうした二つの正義の相克を止揚するものが、また *rât* であることもあわせて主張したい。

3. 正義か運命か

—18世紀家庭劇の展開をめぐる一考察

菅 利恵

18世紀に紡がれた情愛家族の像は、市民的な理想主義に共鳴する部分とこれに対立的な部分とを併せ持っていた。そのためにそれは、新しい市民的な正義が模索された時代において、正義の可能性と不可能性を検証するための格好の

媒体となった。本発表では、いくつかの家庭劇を手がかりにこの検証の実態を炙り出すことによって、市民知識層の政治的、社会的な自意識の拠り所としての正義が、文学の中でどのように希求されたのかを具体的に示す。

正義の問題ととりわけ関わりの深い家庭劇として、まずレッシングの市民悲劇に注目し、そこにみる情愛家族の描写が、社会正義の基盤に道德感情を見る感傷主義の思想とどう結びついているかを検討する。次に、兄弟対立をモチーフにしたシュトゥルム・ウント・ドラングの家庭劇群に注目する。そこでは、私的な家族の位置づけがレッシングの作品とは明確に異なっており、愛の場としての家族が、正義ではない、しかし正義よりも強く人の心をとらえる運命的なものとして描き出されている。

レッシングの作品もシュトゥルム・ウント・ドラングの悲劇も、情愛家族を舞台としつつ、個々人の主体性の尊重という理念を、一方ではこの家族自体のうちに、他方ではこの家族からはみ出した個人のうちに、投影させている。そしてどちらも、異なる形で、この理念を基礎とした正義論の可能性に疑問を投げかけるものとなっている。

4. 教養の再生

—現代正義論への布石

吉永 圭

「社会制度を弱者保護の観点から正当化しながら、個人として弱者保護を意図しない生き方が許されるのは何故か」という現代正義論における問いにつき、例えばロールズの格差原理を批判した分析マルクス主義者 G.A.コーエンのように、個人の倫理観を等閑に付すような議論を批判する論者が存在する。他方でリバタリアニズムは社会制度を信頼しない以上、弱者保護を含めた秩序維持の役割を個人の資質に求めざるを得ない。

制度に頼らない秩序維持という課題を克服する為の鍵は、ドイツ的教養理念にある。ドイツの教養は18世紀までは私的な文芸サークルの中で涵養されていたが、19世紀に入るとフンボルトの教育改革や社会問題の顕在化により、その内在的要素(自由・平等・交流)を展開させて政治的理念となる。この過程はハーバーマスの『公共圏の構造転換』の市民的公共圏の議論と重なる。しかし

教養市民層の政治的地位はフランクフルト国民議会の挫折以降下がり続け、ナチスへの抵抗も満足に出来ぬままドイツは破滅に至る。

歴史的に見て、教養市民層は政治的に脆弱であった。それは差別構造、国家依存、本質不在といった教養内在的理由からであった。しかし他方で教養は政治実践に必要な統合機能を有しており、これこそ上記の課題克服の為の鍵である。反省という側面に着目することで教養の統合機能を強化し、政治実践に臨む市民に相応しい教養を再生させる。

5. 配分か交換か

—近代以降の正義と文学について

大宮 勘一郎

古代以来、正義の二つの区分とされてきた「配分的正義 distributive Gerechtigkeit」と「交換的正義 kommutative Gerechtigkeit」は、前者が一共同体の公共善を実現するための「幾何学的均整」に、後者が個々の契約と交換の平等性を担保する「算術的均衡」に則っている(Aristoteles: Nikomachische Ethik)とされるように、各々異なった原理に従っている。近代において、配分的正義は公法的秩序に引き取られ、共同体をいわば垂直的に担い、他方交換的正義は私法的正義原理として、(市民)社会を水平的にコントロールする。

交換は、脱身分的=一般的な近代市民社会の正義と看做されるならば、元来身分的秩序を前提とした前近代的な正義観念である配分との間に緊張を潜在させることになる。前期近代において、この緊張は主に法秩序と国語意味論的秩序、すなわち国家と文芸によって引き取られてきた。今日、配分的権力としての公権力を極小にとどめ、「算術的に均しく」行われる交換の自由の極大化を正義とする立場と、「幾何学的不均整」を正義の不在として攻撃する立場との緊張と対立は、グローバルな規模で尖鋭化している。もはや調整困難なこの両極の間で動揺し衰弱するのは、交換による富に依拠しつつも福祉・再配分の審級として振る舞う国家だけではない。「国民」を名宛人とする文芸もまた、二つの正義の狭間で存在根拠を掘り崩されている。

国民文芸も、「国語」的価値を保障する「配分」の意味論内にとどまることは難しく、他方しかし、グローバルな「交換」的コミュニケーションへと拡散す

ることを選べば「国語」的彫琢は少なからず犠牲となる。しかし、共同体内の「理解 *Verstehen*」も間共同体的「コミュニケーション *Kommunikation*」も暗黙の前提とはしない、脱国語的文芸の小さな可能性をここに認めることもできる。

本発表は、この対立の表現となっているような特定の文学作品を主題的に扱うわけではない。ここで呈示を試みるのは、一方でこの対立の様態や程度の変容によって条件づけられている文学的言説が、他方においてこのような対立を乗り越える可能性の示唆でもありうるのではないか、という仮説である。

口頭発表：文学Ⅱ (14:30~17:05)

C会場 (210教室)

司会：吉田 孝夫、西尾 宇広

1. ペーター・ヴァイスの戯曲『追究』の劇評史から見るホロコーストの記憶

高田 緑

ペーター・ヴァイスがアウシュビッツ裁判をモデルに執筆、上演したドキュメント戯曲『追究』Die Ermittlung (1965)は、初演から今日まで上演され続け、数多くの劇評が書かれてきた。戯曲がどのように上演され、その上演がどのような批判を受けたのか考察することにより、それぞれの時代における批判の重点や批判された問題の変化、それらの批評の変化の背景にある、ドイツ社会におけるホロコースト理解の変化を明らかにすることができる。

1965年、戯曲『追究』は16ヶ所の劇場で同時に初演され、それらの劇場の1つであるシュトゥットガルトの劇場では、ペーター・パリチュにより、同一の役者が被告人と犠牲者である証人を演じるという演出が行なわれた。1980年にトーマス・シュルテ・ミヒェルスが同様の演出をした際、この演出は大きなスキャンダルとなり、アメリカのユダヤ学研究者ジェームス・エドワード・ヤングらの激しい批判が起きた。ヴァイスが戯曲においてユダヤ人を被害者として描かず、加害者と被害者を入れ替わり可能なものとして描いているとの批判の発端となった上演といえる。

しかし、今日では、同一の役者が複数の役割を演じる演出が高く評価されている。これらの戯曲批評の変化は、1990年のドイツ再統一以降のホロコースト・ディスクールの変化とも合致する。こうした、同様の演出に対する劇評の変化を分析し、ドイツ社会におけるホロコーストの記憶構築をめぐる問題を考察する。

2. ゲオルゲ・クライスの「精神運動年鑑」

松尾 博史

「精神運動年鑑」(1910-1911)は、三巻のみで終刊した短命な論集だったが、そこにはゲオルゲ・クライスの時代批判、学問観が凝縮されている。この雑誌

は、共同編集者であるフリードリヒ・グンドルフとフリードリヒ・ヴォルターズの論文を核として構成されており、この両者の論文を読み解くことによってゲオルゲ・クライスの世界観に迫ることが可能となる。

グンドルフ=ヴォルターズ往復書簡集により、編集の過程がある程度明らかになり、前者が年鑑全体の編集・構成に主要な役割を果たしたことが判った。Carola Groppe (1997) および Rainer Kolk (1998) によって、ゲオルゲ・クライスの社会学的観点からの分析は大きく進展した。また Fiorenza Ratti (2010) や Francesco Rossi (2011) によるグンドルフの Gestalt 概念に関する個別研究や、Kräfte と Gestalt の相克にグンドルフの文学観の展開を見る Michael Reißmann (1997) の文学理論的研究など、特にグンドルフに関しては研究が進んできている。しかしヴォルターズに関しては、グンドルフとの世界観の相違を分析した Groppe (2001) の個別研究はあるものの、あまり研究が進んでいない状況である。本発表では特に「精神運動年鑑」においてグンドルフとヴォルターズの両者がいかに共同してゲオルゲ・クライスの「集団的思想」を構成しようとしたかに焦点を当てるものとなる。

その際中心となるのがゲシュタルトの概念である。本発表ではヴォルターズの Gestalt 論を軸に、文学の枠にとどまらないその射程にも触れることとしたい。

3. Dialogizität des Humors als Grundkonzeption in Christian Morgensterns Poetologie

Herrad Heselhaus

Der Vortrag möchte die dialogische Struktur des Humors und ihre Bedeutung für Christian Morgensterns poetologische Konzeptionen besonders in Hinblick auf die „Galgenlieder“ und „Palmström“ herausarbeiten, um den Blick für eine konzeptionelle Tiefe zu öffnen, die in den häufig einfach als „Nonsense-Gedichte“ bezeichneten Texten selten erkannt wird, und diese auch in einen breiteren kulturellen Horizont überführen. Zwar sind die vergangenen zwanzig Jahre der Christian-Morgenstern-Forschung durch akribische editorische Textarbeit gekennzeichnet, doch hat es keine herausragenden neuen Erkenntnisse im Bereich des Humoristischen, Grotesken und Komischen gegeben. Dies mag damit

zusammenhängen, dass es auch in der allgemeinen Humor-Forschung kaum neue Ansätze gibt, ausgenommen jene, die in soziologischen oder soziolinguistischen Fragestellungen verankert sind und deshalb wenig zur spezifisch literaturwissenschaftlichen Textanalyse beitragen können. In Bezug auf literaturwissenschaftliche Humor-Definitionen ist die hier dargestellte Argumentation auch beeinflusst von Wolfgang Isters berühmter Konzeption des „Kipp-Phänomens“, die aber in neue textuelle und kontextuelle Dimensionen überführt werden wird. Der Vortrag wird im Zusammenhang mit der Übersetzungsthematik auf Texte wie Tanemuras höchst interessante Übersetzung der „Galgenlieder“ (2003) beispielhaft eingehen und sie für seine Argumentation fruchtbar machen. Er berücksichtigt auch die gleichzeitig erschienene Darstellung von Wilson (2003), setzt sich aber dezidiert von den überwiegend biografischen, editorischen und gattungstheoretischen Fragestellungen ab.

4. 媒介性、誘惑、出来事

—ポール・ド・マンのヘルダリン受容をめぐって

林 英哉

昨年 2013 年はポール・ド・マンの没後 30 年のメモリアルイヤーであった。そして、それに合わせた訳書の出版や雑誌での特集などにより、日本においても彼の仕事の再評価が一層進んできた。しかし、彼がもたらした文学理論の革新は、主に英米仏文学の領域で受容され、ドイツ文学においてはそれらと同等の注目を得ているわけではないように思われる。このような状況下では、ド・マンがヘルダリンについていくつもの論考を書き、講演を行ったにもかかわらず、二人の関係性が正当な関心を持って論じられてはこなかったのも当然であるかもしれない。ド・マンは、脱構築的批評に舵を切り、レトリックという観点を重要視しはじめる 1970 年前後を境に、ヘルダリンをメインに取り上げて論じることはなくなる。ただし、それ以後も断片的にはあるがヘルダリンへの言及を行い続けた。本発表はそれについても視野に含めることによって、初期ド・マンから、「アレゴリーとしてのテキスト」や「読むことの不可能性」を主

第1日 10月11日(土)

張する晩年に至るまでの理論的發展とヘルダリン受容との間の密接な関係性について、ひとつのアウトラインを描くことを試みる。具体的には、『あたかも祝いの日に…』『ライン』『ムネーモシュネー』内の詩句をド・マンがどう読んだのかに焦点を当てていく。発表タイトルがそれぞれに対応している。本発表はヘルダリン論ではなくド・マン論ではあるものの、双方にとって有益な議論となれば幸いである。

口頭発表：文化・社会 I (14:30~17:05)

D会場(206教室)

司会：山崎明日香、小林哲也

1. ロマニストとゲルマニスティク

—E・R・クルツィウスの著作におけるグリムへの言及

横道 誠

20世紀のドイツのロマニスト、エルンスト・ローベルト・クルツィウスと、グリム兄弟の関係について考察する。研究テーマとしてはいわゆるマイナー・トピックである。クルツィウスはグリム兄弟の没後に生まれたため、直接の交流は持ち得なかった。ロマニストとゲルマニストという関係にあるが、両者の経歴が密接に連関しているわけではない。さらに言えば、クルツィウスはグリム兄弟に対して必ずしも好意的ではなかった。ヤーコプ・グリムは、『ヨーロッパ文学とラテン的中世』において、書物よりも口承を重んじる風潮を作り出し、偏狭なナショナリズムを煽った存在として厳しく批判されている。『メルヘン集』の仕事を途中から主導したヴィルヘルム・グリムはゲーテ論で言及されるが、ゲーテの実務的性格を強調するために参照されているにすぎない。注目したいのはT・S・エリオット論である。そこでは、ヤーコプ・グリム以来のドイツの森林崇拜・豊穡儀礼研究の学統が英国のエリオットの『荒地』に流れ込んでいることが、肯定的に言及されている。さまざまな別のテキストを参照しながら、クルツィウスのグリムに対する見解を整合的に理解していく。ひとりの卓抜なロマニストへの着目をつうじて、ゲルマニスティクとドイツ文化の歴史の一側面に光をあてる試みである。

2. アードルフ・ヘンツェの筆跡判定

—そのメディア史および観相学史における意義

遠藤 浩介

本発表では、出版業者、作家として19世紀中葉に活躍したアードルフ・ヘンツェが、1851年から1854年にかけて『ライプツィヒ・絵入り新聞』に連載した、手書き文字の筆跡からの性格判定と、その手法として提唱した『手書き文

字占い術 (Chirogrammatomantie)』に、メディア史と観相学史というふたつの観点から光を当てる。

メディア史：19世紀中葉における筆跡をめぐる言説の背景には、挿絵印刷技術やダゲレオタイプといった視覚メディアの発達、および絵入り新聞というメディアの普及がある。

観相学史：ヘンツェは、18世紀末において観相学の大家であったラーヴァターが試みた筆跡判定と、20世紀初頭の筆跡学とを結ぶ、いわば過渡期に位置している。ただし、彼の筆跡判定は読者とのコミュニケーションを重視しており、この点で両者と大きく異なる。

現在、ヘンツェに関する本格的な研究は皆無に等しい(例外は Henze 2005、ただし未出版)。『ライブツィヒ・絵入り新聞』の挿絵についても、まとまった先行研究は少ない(Wachtel 1969; Gebhardt 1997)。ましてや、当時の大衆メディアにおける観相学の復活についても、これまでほとんど言及がなされていない(骨相学については Hagner 2007)。本発表はヘンツェを考察の中心に置くことにより、これらの間隙の一旦を埋める試みとなる。

3. 「読書の民主化」と「読書の規格化」

—ドイツ連邦共和国の読書文化に対するブッククラブの影響

竹岡 健一

小売書籍販売の外部にあって、初版刊行から一定期間が経過した後に、出版社からライセンスを得て上質な装丁の本を生産し、会員向けに安く販売するブッククラブは、ドイツ語圏では19世後半から登場し、1920～80年代にかけて隆昌を見た。この書籍販売形式について、発表者はこれまでに、ワイマール共和国時代を中心に全体的な発展の経過を跡づけるとともに、保守的な思想傾向を持つ「ドイツ家庭文庫」の1945年以前の活動について、詳細な事例研究を行った。本発表では、第二次世界大戦後の状況に焦点をあて、ブッククラブが、本を買って読む習慣を広く大衆に普及させる「読書の民主化」と、読書に供される本の多様性を制限する「読書の規格化」という二つの点で、ドイツ連邦共和国の読書文化に大きな影響を及ぼしたことを明らかにする。すなわち、学歴や所得の低い国民層が本を購入することを容易にする一方で、提供する本のジャ

ンルやタイトル数を限定したのである。こうしたブッククラブの活動は、一面において、通俗的・娯楽的な読み物の大量の普及と、軽便で気楽な読書の普及をもたらし、「文化財の商業化」、「文学消費の集団化」といった批判も向けられたが、必ずしも妥当とは思われない。というのも、「読書の秩序」の解体について言えば、それは決してブッククラブにのみ帰されるものではないし、他方で、「読書の向上」への貢献という肯定的な側面が過小評価されてはならないからである。

4. ドイツ統一後におけるキューバ表象

—W・ヴェンダース監督音楽ドキュメンタリー『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』からH・C・ブーフ『ハバナに死す』まで

林寄 伸二

キューバ革命を経た1960年代、サルトル等のフランス左翼知識人の影響で当時の東西分裂ドイツにも波及した親キューバ主義は、東欧社会主義の衰退と崩壊によって一旦は下火となるが、ドイツ統一後約10年を経た世紀転換期頃、「キューバの波 Kuba-Welle」とも称されるキューバ・ブームとして蘇る。

本発表では、遠い異国キューバに対するドイツ人の異様な関心に着目し、ドイツ統一後にキューバを扱ったドキュメンタリー映画（ヴェンダース『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』1999、ガウルケ『ハバナを愛す』1999）や文学（ブーフ『ハバナに死す』2007）を取り上げ、ドイツ統一後におけるキューバ表象をポスト社会主義、さらにはポスト植民地主義の文脈で考察したい。

異文化像はしばしば自己を映し出す鏡であり、それゆえ異文化像との取り組みは自己反省にもつながる。J. R. ホセク（2012）も指摘するように、二つのドキュメンタリーで演出されるキューバ表象は、ドイツ統一を機に新たなナショナル・アイデンティティを模索する東西ドイツ人の理想を反映している面がある。他方、『ヴェニスに死す』の改作でもあるブーフの物語は、キューバと主人公の没落を描き出すことで、ドイツ人の理想の投影としてのキューバ表象を相対化する。また、サルトルのキューバ礼賛から始まるこの物語は、ポスト植民地主義状況におけるヨーロッパと第三世界の関係についての問いも投げかけている。

口頭発表：語学 (14:30~17:05)

E会場 (203教室)

司会：佐藤 和弘、金子 哲太

1. 否定呼応の意味論 — 中高ドイツ語を中心に

西脇 麻衣子

同一文中の複数の否定要素が互いに打消し合わずに文全体として否定の意味を保つことを否定呼応というが、中高ドイツ語期までの否定表現のあり方は、現代標準ドイツ語と異なり、この否定呼応が一般的であった。古高ドイツ語期に比べ中高ドイツ語期では否定呼応現象が減少し、単一の否定要素（特に *niht*）による否定表現が増加してきたとされるが、本発表では、どのような文脈で否定呼応が保たれるかについて、*Das Nibelungenlied* (1200年頃) をコーパスとして用い検討する。

否定呼応は語法の助動詞など特定のタイプの動詞と多く共起するとされるが、そのようなタイプの動詞は不定詞句を伴い、定動詞部分及び不定詞句部分が表すそれぞれのことながら一つの文の中に構造化されていると考えられる。このような文が否定される時、否定要素の作用領域が問題となるが、否定が定動詞部分にかかる場合を上位否定、不定詞句部分にかかる場合を下位否定という。本発表では、2つのことながらを表す構造をもつ文が上位否定される時、その両方のことながらを表す語句にそれぞれ否定の標識がつくため、特定のタイプの動詞に否定呼応が多く見られるとする説明を提案する。

否定呼応は統語的に、また韻律の観点から論じられてきたが、本発表では、特に *ne/en – niht* のタイプの否定呼応を意味論的に説明することを目指す。また、他の否定呼応のタイプも射程に入れ、否定呼応の通時的考察を試みたい。

2. 「外来語」の意味の変容をめぐって

薦田 奈美

語借用の際、外国語から採り入れられた語は、音的・文字的・形態的にどの程度受け入れ言語に同化 (*integrieren*) しているかによって、「外来語」ないし「借用語」と呼ばれる。本発表では、語借用を意味的観点から捉え、「外来語が

意味的に同化する」とはどのような現象を示すのかを明らかにしようとするものである。対象とするのは、フランス語からドイツ語へ採り入れられた語である。

外来語の意味の歴史的変容は、意味の拡大・縮小・良化・悪化といった類型に分類できる(Nübling 2008)。しかし、元の外国語での意味と受け入れ言語での意味とを詳細に比較すると、借用時に起こる変化と、借用した後に受け入れ言語内で起こる変化とが混在していることが分かる。「同化」は「採り入れられた外国語に対する受け入れ言語の体系からの干渉」(Volland 1986)として定義されるものであるので、「外来語の意味的同化」には、借用時に起こる変化は含まれないと考えられる。

外来語と既存語とを意味の観点で見ると、意味の衝突が問題となる。受け入れ言語に外来語とほぼ同意味の語が存在し、その2つの語が共存している現象は *Dublette* (双生語) と呼ばれる。*Dublette* として定着するには、既存語との意味的な微差が必要である。この観点からすると、「外来語が意味的に同化する」とは、外来語の意味変化そのものを指すのではなく、既存語との意味上の差異化が生じることを指す。この既存語との意味上の差異化について、19世紀末の Hermann Dunger による『ドイツ語化辞典』(1882)の記述などに基づいて考察を行う。

3. 思考内容を表す直接話法に対する引用符の適用について —トーマス・マンの『ヴェニスに死す』における検証

中島 伸

ドイツ語正書法では、語り手の発言・思考内容を表す直接話法に引用符が適用されることになっている。しかし、ドイツ文学作品における作中人物の思考内容を表す直接話法に関しては、必ずしもドイツ語正書法の規則通りに引用符が適用されているとは限らない。本発表では、トーマス・マンの『ヴェニスに死す』中の引用符が適用されている作中人物の思考内容を表す直接話法と引用符が適用されていない作中人物の思考内容を表す直接話法の具体例を基に、3つの引用形式、すなわち直接話法と間接話法、そして間接話法の特殊形である体験話法の形式的特徴と用法について言及する。この言及内容から、作中人物の

思考内容を表す直接話法に引用符が適用されていない現象が起こるのは、想定された直接話法から導入文と引用符が取り去られた地の文の形式で、人称と定形の法のみを語り手の視点から見た表現に換える体験話法に内包されている場合であるという仮説を述べる。この仮説によって、鈴木(1992)などで挙げられている体験話法識別のシグナルに「引用符が適用されていない直接話法」を加えることが可能となり、読者にとって体験話法の識別が更に容易となることが考えられる。また、体験話法に関する先行研究であまり扱われていない体験話法と直接話法の文体的効果、すなわち両者が表す内容の読者に対する印象の度合の強弱について検証することによって、本発表は文学作品を解釈する上で有益なものになるのではないのか。

4. 発話行為副詞類のメタ言語的性質および談話における寄与

高 裕輔

本発表では *ehrlich gesagt*, *kurz gesagt*, *nebenbei bemerkt* 等の発話行為副詞類を対象として、これらが持つメタ言語的性質は文の構成原理から得られることを示す。さらにこれらはメタ言語的性質を媒介として先行する談話と後続する文を連結させる役割があると論じる。

{*Ehrlich gesagt*/ *Kurz gesagt*/ *Nebenbei bemerkt*}, *ich muss los.* のような文において発話行為副詞類が言及するのは、*ehrlich* である発話者、*kurz* である言語表現、および *nebenbei* であるという談話における文の位置づけ、等のメタ言語的要素である。従来メタ言語的要素は実用論における対象であるため (cf. Recanati 2004)、メタ言語的性質を持つ発話行為副詞類の文意味論・談話意味論における寄与という問題に関する議論はこれまで十分に行われていない (cf. Ortner 1983, Thim-Mabrey 1988, Carston 1999, Blakemore 2002)。これに対し、近年意味論において理論的な道具立てが整備されつつある (cf. Potts 2003, 2005)。Potts は発話行為副詞を分析するために、文の真理条件を計算する論理の上位に、メタ言語的要素を項として導入する新たな論理を設ける。ところが、Potts の理論は発話行為副詞類一般に対して分析を提示できない。本発表ではこの理論を修正・拡張することで現象の包括的な説明を試みたい。さらに談話に関しても、発話行為副詞類は先行する談話(談話分節ないし文)と後続する文

第1日 10月11日(土)

を連結するという性質があると考えられるが、先行談話の関与は Potts の理論では説明されない。本発表では、発話行為副詞類のメタ言語的性質を通じて先行談話との連結が行われると論じ、理論的な解法を提示したい。

ブース発表Ⅱ (16:00~17:30)

F会場 (207教室)

スマートフォンを使ったドイツ語アクティブラーニングの実践報告

熊谷 哲哉

ドイツ語教育におけるマルチメディアの利用は、CALLをはじめ、インターネットを利用した教材開発や授業環境づくり、さらにはタブレット型端末や、携帯電話、スマートフォンを利用した教授法も考案されている。また、学生が自律的に学ぶアクティブラーニングの方法を語学教育へ応用している事例も数多く報告されている。

しかし、このような教授法の問題点は、一人一台ずつ使えるiPadや、グループワークに最適化された教室などの設備が、どの大学でも同じように利用できるわけではないという点にある。とりわけドイツ語教育の大部分を担っている本務校を持たない非常勤講師や、教室の設備改善に関して発言しづらい新任教員にとっては、なかなか実践できないのが現状である。

本発表では、いまや90%を超える学生が所有する、スマートフォンを利用した授業実践について報告する。この教育プログラムでは、音声認識アプリを使って発音のトレーニングを積み、さらにグループごとに会話文を作って文章を読む練習をし、最終的には動画にまとめて発表する、という活動を通して文法的知識を発音と作文、そして発信へと展開する。

このような授業実践が発音のトレーニングだけでなく、文法の理解やドイツ語作文の練習としても有効であったことを、アンケート結果を元に報告し、さらに問題点や解決法、また今後の可能性についても来場者と意見交換をしたい。

シンポジウムV (10:00~13:00)

A会場 (102教室)

Ästhetik der Landschaft in der Literatur von Ost und West

司会 : Hiroshi Yamamoto

Das Symposium beschäftigt sich mit der Landschaft als ästhetischem Phänomen, wobei in den Vorträgen versucht wird, eine Reihe verschiedener Aspekte zu beleuchten, die in der Landschaftsästhetik bislang unterbelichtet waren, wie z.B. der Einfluss der chinesisch-englischen Gärten auf die deutsche Literatur oder die Vermessung des Körpers als exotische Landschaft im Südseediskurs.

Bevor es im 18. Jahrhundert zu einer philosophischen Auseinandersetzung mit der Landschaft und ihrer Ästhetik kommt, wurde Landschaft hauptsächlich als rückwärtsgewandte Vision begriffen. So bei Petrarca, der nach der Besteigung des Mont Ventoux am 26. April 1336 seine Eindrücke unmittelbar danach aufschrieb und zum ersten Mal Natur als ein ästhetisches Phänomen begriff, aber auch schon der antike Spruch *Et in Arcadia ego* deutet auf die implizite Zeitlichkeit und die Idealisierung eines vergangenen goldenen Zeitalters. War noch in der Anakreontik das zentrale Motiv der ästhetischen Landschaft das Arkadien der Hirten, d.h. die bukolische Landschaft, rücken Mitte des 18. Jahrhunderts zunehmend Aspekte der Wahrnehmungsästhetik in den Vordergrund. Eine wichtige Rolle spielen dabei Begegnungen mit fremden Gartenkonzepten aus Asien sowie die sich daraus entwickelnden Hybridformen. In den Vorträgen kommen im Wesentlichen zwei Aspekte zum Vorschein: zum einen die Erfindung der Landschaft als eine ästhetische Konstruktion, die historisch im Wandel ist und abhängig von den Kontexten ihrer Entstehung (bzw. dem jeweiligen Dispositiv); zum anderen die interkulturelle Perspektivierung der Problemstellung, weshalb dem Titel auch die Erweiterung "von Ost und West" hinzugefügt wurde.

Der erste Beitrag befasst sich entsprechend mit der chinesisch-englischen Gartenvorstellung, untersucht ihre ästhetischen Implikationen und ihre dichterische Umsetzung in der deutschen Literatur. Dabei wird u.a. auf die

zeitgenössische, insbesondere von L. A. Unzer angestoßene Diskussion eingegangen, inwieweit die chinesische Gartenästhetik eine Erweiterung des europäischen bzw. deutschen Geschmacks darstellt. Der zweite Vortrag nimmt die interkulturelle Blickrichtung auf und demonstriert am Beispiel der japanischen Gartenästhetik die Unterschiede zu dem im Westen geführten Landschaftsdiskurs. Der dritte Vortrag beschäftigt sich mit der Verflechtung von Symbol und Landschaft bei Goethe und betrachtet aus dieser Perspektive die Landschaftsdarstellung in den Leiden des jungen Werthers, Goethes Reisebeschreibungen sowie in den Wahlverwandtschaften und den beiden Wilhelm Meister Geschichten. Ebenfalls interkulturell ausgerichtet ist der 4. Vortrag, der abschließend zeigt, wie die Pazifik-Insel Samoa als ambivalenter Raum der Hybridität diskursiv konstruiert und der exotische Körper mit ästhetischen Vorstellungen wie z.B. Landschaftskonzepten aufgeladen wird.

1 . Imaginationen des chinesischen Gartens in der deutschen Literatur
des 18. Jahrhunderts

Arne Klawitter

Der heute noch weitgehend unbekannt Dichter und Literaturkritiker Ludwig August Unzer (1748-74) unternahm mit seiner 1773 publizierten Abhandlung „Über die chinesischen Gärten“ einen ersten Versuch, die bereits in England vor allem durch William Chambers (1723-1796) verbreitete Vorstellung chinesischer Gärten auch in Deutschland einem größeren Publikum bekannt zu machen. Chambers Beschreibung chinesischer Gärten führte zu einer heftigen Diskussion darüber, ob es diese Gärten, so wie er sie darstellte, wirklich gab. Der Wortführer derjenigen, die ihre Existenz bestritten – und seine Meinung sollte dann unter den deutschen Gelehrten zur maßgeblichen werden –, war Christian Cay Lorenz Hirschfeld (1742-1792). Für ihn stehen die von Chambers beschriebenen Vorzüge der chinesischen Gärten im krassen Gegensatz zum chinesischen Geist und Charakter. Doch beruhen seine Ansichten, wie ich in meinen

Vortrag zeigen werde, auf falschen Vorurteilen, die zu dieser Zeit in Europa herrschten.

Der Vortrag stellt die Grundideen der englisch-chinoisen Gartenkonzeption dar und geht den Fragen nach, welches Ziel Unzer mit der Einführung dieses Konzepts in die deutsche Literatur verfolgte und wie er es poetisch umsetzte, was im Einzelnen an seiner Elegie „Vou-ti bey Tsin-nas Grabe“ und an seinen beiden chinesischen Sonetten gezeigt wird. Außerdem setzt sich der Vortrag mit der Auffassung auseinander, ob Unzer wirklich als der „Vater der chinesischen Poesie auf deutschem Grund und Boden“ anzusehen sei – wie ein Rezensent des *Magazins der deutschen Critik* ihn einmal nannte.

2. Landschaftsbegriff und -ästhetik als Gehen und Beschreiben bei Xie Lingyun, Petrarca und Bashō

Robert F. Wittkamp

Gernot Böhme, dem es um die literarische Umsetzung des „Atmosphärischen in der Naturerfahrung“ geht, wählt als das Beispiel für die „ästhetische Arbeit“ par excellence ein Haiku von Matsuo Bashō. Zur Erläuterung seines Konzeptes zieht er unter anderem die Ausführungen des Gartentheoretikers C.C.L. Hirschfeld (*Theorie der Gartenkunst*, 5 Bde., Leipzig 1779–85) heran. Der Panelbeitrag ist wie folgt strukturiert: 1. erfolgt eine Vorstellung ostasiatischer Landschaftskonzepte. auf dieser Grundlage geht es dann 2. um die Landschaftsästhetik in Bashōs *Oku no Hosomichi* mit dem Ziel, die besonderen Aspekte der *haikai*-Ästhetik näher aufzuzeigen. 3. wird dann der Passus „Unganji“ herausgegriffen, um nach einer kurzen Analyse der literarischen Verfahrensweisen mit Hirschfelds Gartenästhetik abzugleichen. Ziel insgesamt ist der Versuch, Böhmies Atmosphärenbegriff beziehungsweise den „ästhetischen Arbeiter“ für einen hochkanonisierten japanischen Text fruchtbar zu machen, um damit wiederum Licht auf die schwer zu fassende *haikai*-Ästhetik zu werfen.

3. Landschaft und Symbol bei Goethe

Yuho Hisayama

Goethes Symbol-Begriff, der in seinen literarischen sowie wissenschaftlichen Werken eine maßgebliche Rolle spielt, ist von allem Anfang an mit seiner „Wirklichkeitserfahrung“ (Gadamer: *Wahrheit und Methode*, 7. Aufl. 2010, S. 82) der Landschaft aufs Engste verbunden. Als ein Beleg dafür wird in diesem Referat Goethes bekannter Brief an Schiller vom 16./17. August 1797 eingehend zu betrachten sein, in dem der Dichter als Beispiele symbolischer Gegenstände „den Platz auf dem ich wohne“ und „den Raum meines großväterlichen Hauses, Hofes und Gartens“ anführt (FA II, Bd. 4, S. 390). Von diesem Zeitpunkt an hat sich Goethes Landschaftsdarstellung von der „sympathetischen“ (Gundorf: *Goethe*, 1918, S. 245) zur „symbolischen“ Sicht Stück für Stück geändert: Diesen Vorgang werde ich dann in meinem Referat durch eine vergleichende Analyse der Landschaftsbilder in den *Leiden des jungen Werthers*, in der Beschreibung von der drei Schweizreisen, in der *Italienischen Reise* sowie in den *Wahlverwandtschaften* u. a. chronologisch darstellen. Somit wird gesucht, die beiden, in der bisherigen Goetheforschung bereits (etwa von Richard Beitzl, Andreas Müller sowie B. A. Sørensen und Manfred Jurgensen) vielseitig untersuchten Themenfelder, d. h. „Landschaft“ und „Symbol“, miteinander zu verbinden, um so der Bedeutung der Landschaftserfahrung im symbolischen Denken Goethes auf den Grund gehen zu können.

4. Samoa als insula amoena des deutschen Kolonialismus

Thomas Schwarz

Erich Scheurmann, der Autor des *Papalagi* (1919), rühmt Samoa 1927 als „Wunderland“ mit „vulkanischer Natur“, als „Insellandschaft von unberührter“, „tropischer Schönheit“ – „paradiesisch fruchtbar“ und von „reinerhaltener Ursprünglichkeit“. Die „verschwenderische Natur“ erlaube den Samoanern, in einer Art „Kommunismus“ zu leben. Das Klima sei

„malariafrei“, es gebe weder „Giftschlangen“ noch andere „wilde Tiere“. Als idealisierte Naturlandschaft, als liebliche Insel der Tropenzone scheint sich Samoa für eine Siedlungskolonie zu eignen. Ein Werbeprospekt von Richard Deeken schildert die deutsche Kolonie Samoa als „insula amoena“ für Existenzgründer. Er verspricht eine feminisierte Südsee, vor der er zugleich warnt, weil sie „schlimmer als die verführerischste Nixe“ sei. Der Prospekt spricht von einem „Paradiese, wo man erntet, ohne zu säen“. Samoa empfiehlt sich - so der Literat Hans Bethge 1912 - auch als Aufenthaltsort für Aussteiger, die ihre Zeit am tropischen „locus amoenus“ in „süßem Nichtstun, in einer paradiesischen Natur“ verbringen möchten.

Der Vortrag schließt an Gabriele Dürbecks Arbeiten zum „Ozeanismus“ (Stereotype Paradiese, 2008) und an meine Forschung zum „Pazifikismus“ an. Ich vertrete die These, dass Samoa um 1900 diskursiv als ambivalenter Raum der Hybridität konstruiert wird. Der exotistischen Erotisierung steht das koloniale Schreckbild eines Raumes abjekter Verunreinigung entgegen.

口頭発表：文学Ⅲ（10：00～12：35）

C会場（210教室）

司会：熊谷 哲哉、林寄 伸二

1. ハインリヒ・ロッチャーにおける俳優のための音声論の考察
—W. v. フンボルトの言語思想を手掛かりに

山崎 明日香

18世紀末以降のドイツ演劇界では、言語ナショナリズムの高揚や俳優の超地域的な活動に伴い、俳優の語り言葉の純粹化と標準語化が推進されてきた。20世紀初頭には、俳優の発音が政治文化的な綱領に上ると同時に、国民の言語教育の模範として推奨される。本発表はこの潮流に影響を及ぼした演劇評論家ハインリヒ・ロッチャーの『劇的演技術』（1841-46）において提唱された俳優のための音声論を対象に、その理論化の基盤に援用された W. v. フンボルトの言語思想の受容とその影響を考察するものである。その際に、「音声と民族」「音声の純粹化」「音声の支配」という問題圏に焦点を当てて検証する。

比較人類学的観点から考察されたフンボルトの音声は、諸民族の精神文化的差異を構成する基本的単位であった。ロッチャーはこの見解に依拠しつつ、ドイツの口頭言語に対する音声序列化と、「非精神的」な方言の排除を主張した。さらに、純粹音声の運用と精神の明瞭さとの関連についてのフンボルトの考察を援用し、ロッチャーは、言語純粹主義的な発声原理を提唱し、精神の担い手としての新たな俳優像を提示した。そしてフンボルトの考察した言語の本質としての明瞭な発音に、ロッチャーは美的また象徴的な記号としての演劇作用を見出している。

19世紀を通じた俳優の公的でナショナルな主体形成の進展において、この演劇評論家は、俳優の舞台言語を社会文化的また国民模範的な美的記号として理論化したのみならず、俳優の聴覚メディアとしての機能を強化したのである。

2. カフカの音モチーフ

— 『巣穴』における雑音

小松 紀子

断篇『巣穴』(1923)はカフカ最晩年の作品の一つである。一人称の動物の語り手は、前半地中に造りあげた巣について語るが、後半突如出現するシューシュー音 **Zischen** にパニックとなり音源について推測を廻らす。カフカは手紙などで自らを動物に譬えたり、「掘ること」を「書くこと」の比喩として使うことがあった。従来の研究ではそのため自伝的解釈やカフカの自己や実存が問題だとする実存的解釈が有力である一方、語りの形式を問題とする研究も重要な方向性である。

本発表で扱うのは、後半突如現れる **Zischen** である。これは従来の研究では自己の内部からの威嚇の声や絶対的なものや神的なものの暗示、または実存に関する不安など様々な立場から解釈されてきた。ここでは **Zischen** が音であることに注目し、『ある犬の研究』(1922)『巣穴』そして絶筆『ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』(1924)に至る音楽・音モチーフの一環として考えたい。

『ある犬の研究』から『巣穴』へと連なる雑音のモチーフは、カフカの晩年の主要テーマである共同体への帰属をめぐる問題の延長線上にあると考えられる。『ある犬の研究』では動物の語り手の全身を震撼させる音によって共同体からの追放が表され、『巣穴』では共同体に属さず地中深くひとり生きる語り手の意識下から、他者を求める孤独な個の期待と不安として **Zischen** が噴出する。本発表では『巣穴』のこの音について深く考察したい。

3. テキスト内部に圧縮される声

— トーマス・クリングの詩作にみられるメディア論的視座

林 志津江

詩人トーマス・クリング(Thomas Kling、1957-2005)は、作品朗読におけるパフォーマンス性を重視したことで知られる。しかしそのパフォーマンス性は単なる朗読の問題としてのみならず、書かれたテキストにおいても意識的に追究されている。本発表では1993年発表の作品「吸い取り紙。バイルマーメア」

(*löschblatt.bijlmermeer*) を取り上げ、クリングの詩作におけるテキスト(文字)と朗読(声)の補完的関係を考察したい。

この作品に特徴的なのは、語末の文字や母音の意図的な省略である。テキスト中には動詞の語末にある"e"ないし"en"の省略、あるいは音節の意図的な収縮による"e""u""i"音の欠落が随所に見られるが、この省略は単なる口語性の極端な強調に留まらない。標準的なドイツ語正書法と異なるつづり字は、スムーズなテキストの黙読を妨げ、朗読がむしろ書かれたテキストの理解を容易いものにする。他方、作品タイトルにある「バイルマーメア」というアムステルダム郊外の一地区の名は、1992年に起きたイスラエル機の墜落事故現場である。テキスト上のつづり字の変容が事故による機体や人間の身体の損傷と重ね合わされる時、厳密には意味の次元に反映させることのできないはずのつづり字の変容が、飛行機や身体の損傷という詩の主題と意味の内にテキストの視覚的構成として反映されるのである。本発表ではテキストの語の意味がつづり字と朗読の双方から成立するというこのテーゼを、主にメディア論的見地から考察を試みることにしたい。

4. 謎と影の国をさまよう

—クレメンス・マイヤー『石の中』における日本

杵渕 博樹

クレメンス・マイヤーの『石の中』*Im Stein* (2013) は、1990年から21世紀初頭にいたる、旧東独地域における売春ビジネスの諸相が描かれる、22章構成、558頁におよぶ大長編である。ポン引き、売春婦、警官、ラジオの風俗情報パーソナリティなど、語り手は章ごとに交代し、さまざまな角度から巨大な売春マーケットを浮かび上がらせる。ただし、語り手たちは必ずしも対等の比重を持つわけではなく、数度にわたって登場する語り手としての特権を持った、事実上の主人公が二人存在する。そのうちの一人が、日本での体験を報告しているのだが、この章「東京ゼロ年」は、意識の断絶を伴う、夢とも現実ともつかない描写、あるいは生死の境をさまよう者の〈意識〉を追うような内容の特徴としており、異色の存在感を放っている。

この作品の物語戦術は、関係者による生々しい証言のスタイルと、主人公た

ちの活躍のハードボイルド調の描写、そして、過去と現在を交錯させる技巧的な心理描写を中心に形成されているが、広大な物語世界を束ねているのは、ローカルな細部に支えられた土着的なリアリズムである。しかし、そこに狭い意味でのリアリズムを超える次元が加わって初めて本作の物語は生命を吹き込まれる。本発表では、作品中心近くに置かれ、本作中唯一、舞台がドイツを離れる一章「東京ゼロ年」を分析し、本章の、物語世界から逸脱しつつ、その全体を飲み込むかのような物語構造上の機能に考察を加える。

口頭発表：文化・社会Ⅱ (10:40~12:35)

D会場 (206教室)

司会：今井 敦、永畑 紗織

1. 灰と鉛の想像力

—アンゼラム・キーファーにおける錬金術とパウル・ツェラン

関口 裕昭

ドイツ現代美術を代表するアンゼラム・キーファー(1945~)は、鉛、灰、藁などの物質を用いた多くの絵画・彫刻を制作しているが、錬金術への志向性が顕著である。またキーファーは古今東西の詩人・思想家、ギリシア・北欧神話、カバラ、旧約聖書などさまざまなテクストを参照し、詩句やタイトルを作品の中に描くことがあり、パウル・ツェランは其中で特権的な位置を占めている。

本発表ではキーファーがツェランに捧げた作品を、「死のフーガ」をもとにした80年代の「ズラミート」連作から最新作に至るまで、錬金術の視点から新しい解釈の光を当ててみたい。ツェランもまた錬金術を絶えず意識しながら詩作したことを指摘しつつ、灰や鉛に関する想像力が両者の間でどのような相違がみられるのかを考察する。それを通して、キーファーの内部で葛藤している *Deutschtum* と *Judentum* の様相が浮き彫りにされることであろう。

キーファーの作品は難解であり、本人が認めているようにさまざまな解釈が可能である。その一因に彼の政治的立場が見定めにくいことがあげられよう。初期のヒトラー式敬礼をモチーフにした「占領」などの影響からか、ドイツでは今なお根強い拒否反応が残っているようであるが、キーファーの歴史的視座はとてつもなく広く、それら全体を見なければならない。錬金術を重要視するのは彼のそうした態度とも深く関わっている。

錬金術とキーファーの関連は夙に指摘されているが、メランコリーや負の歴史といった従来の切り口だけでなく、彼が参照したロバート・フラッドを援用しつつ、マイクロコスモスとマクロコスモスの対応など、錬金術の積極的な意味にも目を向けていきたい。

2. 東欧ユダヤ文化の躍動 —イディッシュ演劇研究を
カフカの磁場と政治的バイアスから解放する試み

小倉 直子

イディッシュ演劇はこれまで、西欧近代演劇とは同じ土俵には立ちえない、稚拙な「演劇的試み」程度に理解され、そのため、「外的圧力により消滅させられた文化」を強調する文脈で言及されるか、あるいは、カフカ的人格理解および作品解釈におけるひとつのツールとして利用されるかなど、演劇としては、概して軽視されてきたといえる。長い流浪の歴史にあって複数の文化と接触しながら発展したイディッシュ文化は、しかし、ユダヤの伝統はもとより、中世以来の中・東欧の血脈を継ぐものである。なかでも、旧来、娯楽としての演劇を禁じてきた旧体質のユダヤ教理解を突き抜け具象化されたイディッシュ演劇は、東欧ユダヤ史においても、中・東欧文化史においても極めて貴重な文化遺産である。

本発表では、マルゴリス(2012)のホロコーストに照らした歴史的研究や、ベック(1971)のカフカ作品への影響を指摘した研究など、従来のイディッシュ演劇研究からは離れ、イディッシュ演劇とその受容者であったハシディズム世界の東欧ユダヤ大衆との純粋な関係を J. ラタイネル『過ぎ越しの祭りの夜』(1908)から読み解くことを試みる。その際には、ハシディズムおよびイディッシュ演劇史を簡略に俯瞰したうえで、イディッシュ演劇史における主題の変遷と、劇中に現れる語彙の移り変わり(ヘブライ語由来か、東欧諸語由来か、あるいはロシア語か)の2点を軸に、そこに析出した東欧ユダヤの大衆性の内実を探る。

3. モノの〈声〉

—1930年頃のジークフリート・クラカウアーの「空間イメージ」論

大島 直史

ジークフリート・クラカウアーは、「フランクフルト学派」のなかでも、所与の社会的現実を描写する「ナイーヴな」リアリストであるという評価が受容史において彼を批判する際の常套句となってきた。しかし、彼のリアリズムに対

する批判は一方で、当初からその「風変わりさ」に関する表明と不可分の関係にあった。彼の旧友、論敵でもあったアドルノによれば、それは「モノ」の次元の探究と密接に関連していた。本研究が出発点とするのも、彼のリアリズムがこの特定の「モノ世界」を触知する「モノによる思考」の所産であるとする視点である。

本発表では、クラカウアーの『ベルリンとその他の路上』(1964)に編纂された1930年のエッセイ、①「職業紹介所について 一空間の構造」と②「路上の叫び声」における「空間イメージ」の問題に注目する。まず、①において、社会的に疎外された無意識的な現実を可視化するメディアとして、空間が言語と対照的な位置価値を与えられていることを指摘する。次に、言語に対するこの空間的な無意識は、②において、路上空間そのものが発する「無気味な」「叫び声」として表象されることを確認する。最後に、こうした「モノ」の〈声〉の問題系は、『映画の理論』(1960)においても映像内の同一化不可能な「物音」として展開される一貫したモチーフであると同時に、都市空間の知覚体験に関する彼のヴァイマル期のテクスト群を新たに前景化させる鍵概念であることを提唱する。

口頭発表：文学Ⅳ（10：00～12：35）

E会場（203教室）

司会：奥田 敏広、武田 良材

1. 自然は跳躍しない

—カントとゲーテにおける自然認識の原理

茅野 大樹

18世紀以降の自然哲学の基礎には、「自然は跳躍しない」という標語で広く共有された「連続律」の原理がある。偶然と混沌に満ちた自然の現象を前にして、なおそこに一貫した連続性の原理を見出すとは、無限に繰り返される自然の生成の根底に不変の原理を認めるということである。カントとゲーテもまた、こうした同時代の自然哲学の影響を多分に受けながら自然の認識論を形成していった。しかし、両者は実際に自然を子細に観察することによって、必ずしも連続性の原理には還元できない、断絶と跳躍に満ちた多くの現象を導き出している。こうした自然の連続性原理の崩れに対して、両者は異なるアプローチを取る。つまり、カントが現象から独立した先験的理性の側に統一と連続の原理を保証したのに対して、ゲーテはあくまで自然現象の観察の過程に分析と総合の両方の可能性を前提することで、不規則な現象をも連続する自然の規則の下に説明することを試みた。本発表では、両者の自然哲学に関するカッシーラー、ジンメル、ベンヤミン等の研究も適宜参照しながら、連続律に基づいた自然現象の解明においていかなる認識能力が問われていたかを明らかにする。それにより、単なる影響関係には還元できない、カントとゲーテに共通する認識論の諸問題の一角に光を当てることを目指したい。

2. 普遍的類型としての小説理論？

—Fr. シュレーゲルの小説理論における小説反対論の影響について

北原 寛子

Fr. シュレーゲルの小説理論についてはこれまでさかんに研究され、多くの成果が挙げられている。その独自性が強調される一方で、ヘルダーやシラーらの先行するテキストから受けた影響についても、R. ハイムやH. アイヒナーらによ

ってすでに指摘されている。しかし今回あえてこの課題に取り組む理由は、小説理論の形成に的を絞り、18世紀の議論を集大成しつつ独創性を加味し、19世紀以降の傾向に大きな影響を与えた Fr. シュレーゲルの思想が、歴史的にどのような役割を果たしたのかという観点で検討するためである。先行するテキストでは小説とは無縁であったり、それどころか小説に反対する立場から発せられたりした言葉が、Fr. シュレーゲルによって一旦は小説と関連しない文脈でそのまま引き継がれたり、あるいは反論されたりしつつ、最終的に小説理論へと組み込まれた現象を確認することができるであろう。彼はヘルダーの『人間性書簡』における思想を引き継ぎ、小説はあらゆる文化的な分野のテキストを内包する可能性を秘めた普遍的文学であると「アテネウム断片」で主張したが、同様の主張が小説理論についてもなされるのではないか。つまり小説理論は、芸術・哲学・教育など多様な分野のテキストから影響を受け、それらを再解釈し、特定の側面を強調したり意味の転換を図ったりしつつ形成された文化論の普遍的類型とみなすことができるのではないか。この仮説に基づいてテキストの分析をおこない、考察を試みる。

3. レッシングを演技するフリードリヒ・シュレーゲル ーロマン主義的批評の生成

胡屋 武志

フリードリヒ・シュレーゲルは、1790年代半ばの古代ギリシア研究の中で、「全体の精神の理解」に基づく彼独自の新しい古代模倣の方法を構想する。ここでの「模倣」における対象の受容と理解の方法は、「演技」と同一視される「批評」を基礎としたのちの彼の詩学の中心に受け継がれている。この批評が洗練化され、ロマン主義的な批評の方法へと発展するのは、レッシングの受容によってである。

世紀転換を挟んでシュレーゲルが執筆した三つのレッシング論の中に確認されるのは、レッシングに同化しようという彼自身の欲望の存在であり、さらに、この欲望とともにレッシングに換骨奪胎を施すことで批評家の理想を形象化しながら、理想化されたレッシングをシュレーゲルが模倣し、演技する過程である。こうした同化の過程があつて初めて、シュレーゲルはレッシングが持つ「機

知」や「天才性」、「ポレーミク」等の特性を自身の批評の方法の中に取り入れ、「エンチュクロペディー」の概念を基礎とする、これまでの方法を「反転させた」独自の批評概念を定式化することが可能となったのである。

本発表の目的は、以上のような観点から、シュレーゲルのレッシング受容に関する従来の研究に模倣と演技という新しい視点を導入し、そのことによってあらためてシュレーゲルの批評概念の生成と発展を辿りつつ、彼のロマン主義詩学思想の独自性と現代性を浮かび上がらせることにある。

4. 近代における人間学と『創世記』

フリードリヒ・シラーの『モーゼの原典の手引きによる
原初の人間社会についての若干の考察』(1790)を中心に

土屋 京子

新たに獲得された知見と成熟した理性的思考によって、原罪をキリスト教の文脈から切り離して哲学化したのが、18世紀であった。「人間研究こそ正しき知識の目標」と謳われたこの時代では、アダムとイヴの墮落は、幸福な無知から危険は多いが成熟した人知への移行として理解され、原罪によって人間に認識の可能性が開かれたという逆転的解釈が立ち上ってくる。文学においてこの思想は、シュトルム・ウント・ドラング期の理論的作業と文学作品のなかで一度完成を見る。

シラーが1790年に雑誌ターリアに掲載した論考『モーゼの原典の手引きによる原初の人間社会についての若干の考察』では、エデンの園からの放逐を「疑いようもなく人類史上、最大の幸運な出来事」とし、文学をとおした人知の醸成を説いている。確かにここには、カントが『人間の歴史の憶測的始原』(1786)で表した啓蒙主義的歴史観の影響がみられるが、同時に、アダムとイヴの神話を文学として書き換えることを提唱する彼の姿勢には、「新しい神話」の創出による人類の救済をプログラムとしたロマン主義との接点もまた浮かびあがってくる。

ドイツ文学史における墮罪神話のモチーフについて総括的に論じた研究は G. Neumann (1976) のみが挙げられよう。本発表はロマン主義研究者の立場からシラーの論考を解釈し、さらに「近代のアダムとイヴ」という、現代において

第2日 10月12日(日)

も広がりのある主題の変遷を扱うことによってドイツ文学の新たな読みを提示することを大きな課題として示している。

ブース発表Ⅲ (11:30~13:00)

F会場 (207教室)

「人魚」文学を扱う授業の実践報告
—多言語文学間の共同研究と教養教育への還元モデル

中丸 禎子
川島 隆
田中 琢三

発表者3名は他4名とともに、各言語の研究者による超領域的研究および専門研究の教養教育への直接的な還元を目的に、アンデルセン『人魚姫』を共通テキストとした共同研究プロジェクトを遂行している。

従来の文学研究は、国家・言語によって分節され、研究成果の還元は大学院生など比較的高度な教育対象に限定されることが多かった。これに対して、本プロジェクトでは、『人魚姫』に包含される諸テーマを異なる言語の文学研究者が共有することで、研究を超領域化する。そして、それぞれの研究成果を担当する教養教育の授業に盛り込む。

2014年度前期に、発表者3名は「人魚」もしくは「水の精」を扱いうる教養科目もしくはそれに準じる科目を担当する機会を得た。

1. 田中 (フランス文学) : 文系学生対象のヨーロッパ文学講義
2. 川島 (ドイツ文学) : 文学部の比較文学講義
3. 中丸 (北欧文学・ドイツ文学) : 理系学生対象の教養ゼミ

具体的に扱う作品は、『オデュッセイア』、フケー『ウンディーネ』、アンデルセン『人魚姫』、ジロドゥ『オンディーヌ』などである。教養教育に準じる授業の特色として、各作品の解釈は「作家研究」「比較研究」「文化的背景の研究」「ジェンダー論」など文学研究の方法の例としても提示される。

本発表では、相互の比較を交えながら各授業を報告し、来場者との質疑応答を通じて、教養教育のメソッドの確立を目指す。